



# 日本ラテンアメリカ学会 会 報



2024年7月31日

No. 144

1. 理事会報告
  - 第178回理事会
  - 第179回理事会
2. 第45回定期大会の開催
3. 第45回定期大会総会報告
4. 第45回定期大会・研究発表など
5. 早期キャリア研究者支援セミナー（地域合同研究会）報告
6. 第46回定期大会の開催案内
7. 第3回優秀論文賞受賞者のことば
8. 『ラテンアメリカ研究年報』第45号の原稿募集について
9. 新刊書紹介
10. 事務局から

## 1. 理事会報告

### ○第178回理事会

日 時：2024年5月18日(土) 15:00～17:15

場 所（開催方法）：Zoomを使用したオンライン会議

出席者：浅香、石田、磯田（書記）、岩村、宇佐見、大越、奥田、岸川、久野、後藤、近田、  
田村、北條、本谷、舩方、松尾、宮地、村上（理事長）

欠席者：上、小池

陪 席：次期理事若干名

### 〈審議事項〉

#### 1. 定期大会

本谷理事より、定期大会に向けた準備状況が以下のとおり提起された。

2024年5月25日および26日の2日間に慶應義塾大学日吉キャンパスの「来往舎」と「協生館」で実施され、総会のみ対面とZoomを併用し、それ以外は対面のみで開催となる。詳細はポータルサイトに掲載済みであり、プログラム構成は7パネル、4分科会、各2時間である。25日昼は早期キャリア研究者の集いを企画しており、記念講演後の懇親会では能登半島大震災の被災者および早期キャリア研究者は2,000円値引きする。シ

ンポジウムは25日午前中、現役プロレスラーもシンポジウムに登壇する予定である。ポスターセッションには6グループの応募があり、学部生・院生がグループを作って参加する。初日からポスターは掲載予定であるが、2日目お昼休憩時を中心に考えている。ポスターセッションの経費は学会が補助する。親子休憩室、託児所、授乳室も設置しており、事前登録制としていることが共有された。

早期キャリア研究者の集いを取りまとめている松尾理事より、8名の早期キャリア研究者（非会員含む）から参加申し込みを受けていることが報告された。

舛方理事より、総会の司会は川上実行委員長にお願いしたいと依頼があった。

本谷理事より、円安の関係で来日しやすいため、海外からの入会の問い合わせが多くなっていることが報告された。

審議の結果、これらは了承された。

なお、舛方理事より、今後日本語を話さない会員が増えた場合、学会からの連絡は日本語だけでなく英語でも必要になるかもしれないとの意見が共有された。

## 2. 入会・除籍

舛方理事より、入会4名、除籍6名の説明があり、審議の結果了承された。

## 3. 会費請求・支払いの電子化（継続審議事項）

舛方理事より、前回からの継続審議である会費請求および支払いの電子化について以下が提起された。

まず、郵送での会費納入通知を中止することについて前回の総会で了承済みであり、次回総会で承認されれば、クレジット決済あるいはコンビニ決済で会費を納入できるように国際文献社に手続きを依頼する予定である。その場合の支払いの電子化に向けたシステムの導入は8～9月を見込んでいる。なお、クレジット決済を導入する場合、一般会員と早期キャリア会員を見分けられるように入会申請書のフォーマットを一部変更することが提起された。特に海外研究者の入会手続きの場合、以前は会費納入手続きが煩雑だったが、クレジット決済が導入されれば簡略化される。円安の影響等を考慮に入れると、今後海外からの入会希望者が増える可能性がある。以前は早期キャリア研究者であることを証明する署名が必要であったものの、今後は学会HP内のマイページと紐づけることで確認業務を効率化できる。事務局の業務負担が軽減されれば、通常避けられがちな事務局担当理事を決める際もスムーズになるという利点も考えられる。

これに対して、近田理事より、今後会員が減っていくことが予想される中で学会予算の貯蓄も減少していくことが予想されるため、長期的な視点に立って定期的に支出を点検したほうが良いとの提案がなされた。村上理事長より、様々な会員減少対策を講じる必要があるという発言があった。審議の結果、了承されたため、総会で提起される予定である。

## 4. 早期キャリア研究者支援

舛方理事より、早期キャリア研究者支援の改革案について、以下の提案がなされた。4月に実施された早期キャリアのタウンミーティングにおいて、早期キャリア研究者同士のネットワークを強化する研究会の要望がなされた。早期キャリアは日本ラテンアメリカ学会が主催し、ラテン・アメリカ政経学会の会員（本学会の非会員）が研究会に参加する場合は名簿管理ができないと国際文献社から連絡があったため、その場合は組織

化・名簿の管理については次期理事会事務局が担当する。現在学会の早期キャリア研究者の名簿はまとめているが、他の学会のラテンアメリカ研究者を名簿に含めるか否かについては、継続審議が必要とされる。

村上理事長からは、名簿の管理が難しいため、イベント限定で連絡先を扱い、イベント終了後は破棄することが一般的であり、個人情報には慎重に扱う必要があると指摘があった。また、他の学会の傾向としては参加者が特定大学に偏る傾向もあるため、大学および専門の異なる2名を世話人にした方がよいと提案がなされた。

審議の結果、了承されたため、総会で提起される予定である。

## 5. 研究奨励費

岸川理事より、5月16日に応募があった1名の採択について提起された。申請者は、研究部会の報告や研究ノートを出版するなど、研究を完成させるプロセスになることが認められ、研究計画も趣旨に沿ったしっかりしたものである。応募者は他の研究資金も受給中であるが、今回1名のみ申請だったことや、円安で渡航費が高騰しているため、応募者が他の研究資金を得ている場合でも差し支えないのではないかと提起された。

舩方理事からは、上限20万円という金額であることや、共同研究を含められない研究資金を受給している場合、本制度を活用して研究対象国の研究者との研究に結び付けられるため有効ではないかという発言があった。

村上理事長からは、円安で大変な状況のため、本制度が活用されることが好ましいというコメントがあった。

審議の結果、了承された。

## 〈報告事項〉

### 1. 会報

磯田理事より、次号144号（2024年7月末日刊行予定）の企画案が報告された。次号は定期大会や第3回優秀論文賞受賞者のことば等が掲載される予定である。定期大会の原稿については、大会実行委員長を通じて各パネルおよび分科会の司会者や、ポスターセッションの参加者に依頼することが確認された。

### 2. 年報

奥田理事より、現在年報第44号の編集集中であること、3か月ごとの締切で各1~3本の投稿があること、掲載準備が整った原稿が複数あること、掲載が完了次第学会MLで会員に知らせることが報告された。なお、二次査読を断念した事例や二次査読を通過しなかった原稿を除き、査読を通った原稿は順次掲載されていることが確認された。

### 3. 地域研究部会（早期キャリア研究者の集い）

舩方理事より、早期キャリア研究者支援セミナーを4月13日にオンラインおよび対面のハイブリッドで開催したことが報告された。当日は関係理事の協力のもと、多くの参加者が集まり、第1部の早期キャリア研究者の報告に対して理事から温かく熱のこもったコメントがあったことが共有された。これは早期キャリア研究者を育てようとする趣旨に合致しており、報告者3名ともに興味深い内容であった。また、第2部のタウンミーティングにおいても活発な議論があったことが報告された。なお、海外からオンラインで参加した報告者は、在外時に報告ができたことを喜んでいと情報共有された。

4月は学振特別研究員の書類を提出する前段階となるため、業績が1つ追加され、申請書を書くための良いステップアップになるであろうとの見解がなされた。

村上理事長より、第1部は多様な報告であり、興味深かったという発言があった。また、浅香理事から、早期キャリア研究者が参加者との質疑応答を通じて研究構想を固めていく過程は、まるで合同ゼミのようで興味深く、学会という大学以外の場でも研究者養成に貢献できれば良いという意見が共有された。日本ラテンアメリカ学会発足時は研究者以外の多様なバックグラウンドを持つ人が会員として参加していたため、今後の会員減少の歯止めとして、研究者以外の入会を促せばという考えが共有された。

村上理事長より、技術革新（AI）や兵器問題の分野では倫理学との関りが増え、自然科学系も人文科学系（哲学・倫理等）に進出していることから、自然科学系優位の時代でも人文科学系の重要性は色あせない、早期キャリア研究者との交流会を活用しながら、別の分野の研究者との交流の場を設けることが重要ではないかという発言があった。

#### 4. 会計

近田理事より、定期大会のポスターセッション補助を若手支援から出すことが報告された。大会実行委員会から提供されたりストに基づき、会計担当理事が会場でポスター掲載の有無を確認し、それ以降に支払うこととする。今後の海外参加者への海外口座への振り込みについては検討事項である。

第2に、5月8日に坂口会員および藤井会員が会計監査を実施し、藤井会員が総会で報告する予定である。会計監査では、託児補助費として大会時の託児室利用者に対して子供1人当たり1万円を補助している一方、大会費の一部が託児室設置に用いられていることから、大会時の託児について二重に支出が行われているように見えるとの指摘があった。また、両者の支出をあわせて考えるとその額が過大であり会員間での公平性の観点から疑義を呈する意見が出された。

第3に、ゆうちょ銀行の残高が共有され、きらぼし銀行の口座解約を実行したことが報告された。会計書類は支払い関係の書類が多くあるため、全てを引継ぐ必要性は低く、電子媒体化のコストがかさむため、次期理事会で古い会計書類の破棄の検討を依頼する予定である。

第4に、前回理事会で話題になったインボイス制度について、定期大会アルバイトの源泉徴収についての問い合わせがあり、対応を検討する必要があると次期理事会に引き継ぐ予定である。会計担当理事は2年で交代となるため、インボイス制度に対応できるかは要検討すべき案件である。

第5に、2024年度予算案について、クレジット決済の手数料を含めた金額で算出しており、年報・会報は念のため現行通り、早期キャリアはすべての支援制度を利用したと仮定した金額を盛り込んでいることが報告された。なお、J-STAGEはこれまで予備費から支出してきたが、年報の電子化により継続的な支出となるため、予備費ではなく印刷・編集費といった別の項目から支出したほうが良いのではないかと意見が共有された。

村上理事長より、海外参加者がポスターセッションに参加する場合、海外送金手数料がポスターセッションの補助費より高くなるため、海外送金は難しいのではないかと

う意見が共有された。

松尾理事より、託児補助費の不公平という指摘に対しては、必要な人への支出は不公平という指摘にあたらないこと、前回大会時は託児室があったので6年ぶりに参加できた会員もいたこと、子供1人1万円の補助は実質的には実行委員会への補助であること、(実行委員会から託児所利用者に対する請求金額を決断する際、実費請求は高額すぎて利用者を退けてしまうため、利用者側から見た実質負担を考えて請求額を決める)、明治大学は大会予算に余裕があったために実質負担をゼロとした経緯があったことが共有された。また、託児補助費については、2023年度の総会で新設が認められたものの、制度として周知されていないため、大会以外の学会イベントでも使える補助制度として、具体的な利用方法も含めHPで周知すべきではないかとの意見が共有された。

#### 5. ウェブサイト

石田理事より、1月9日から5月17日までのウェブサイト更新実績として、通常のニュース44件、会員新刊情報1件、会報の最新号、第3回学会優秀論文賞の結果の掲載・配信があったと報告された。ペンディングになっている作業は2件あり、1件目は地域研究部会の2021年以降の実施記録が掲載できていないことであるものの、翌週中には掲載できる予定であること、2件目として、前回理事会で決まった年報バックナンバーの削除の作業が滞り、次期理事に申し送る予定であることが確認された。

なお、学会ウェブサイトの過去の定期大会に関する情報は過去の会報掲載の文章をコピーしているが、大会についてはポータルサイトが設置されるようになり、会報も印刷版が廃止され同じサイトで閲覧できるようになった今、会報の内容を転載する意義は何か、今一度検討してもよいのではという意見も提示された。この点については、大会ポータルサイトが毎回設置されると決まったわけではないこと、毎回作るのであれば、大会予算の増額を含めて議論が必要であること、過去の大会ポータルサイトが永続的に残る保証はなくリンク切れの可能性もあり得ること、大会のアーカイブ化については、次期理事会に申し送りする必要があることも共有された。

#### 6. 学術会議・学術交流

岸川理事より、JCASAのニューズレター第18号に、学会の報告を掲載したことが報告された。早期キャリア支援制度の広報に取り組みなければ、申請件数が増えない可能性もあり、次期理事会に引き継ぐ予定である。

#### 7. 事務局

舩方理事より、今春実施された新理事会選挙について、選挙管理委員会・岩村委員長(大会企画担当理事兼任)から提出を受けた報告書に基づき報告があった。岩村委員長からは、辞退要件等、選挙結果の処理手順について再整備の必要があるとの意見が表明された。

#### 8. 優秀論文賞

舩方理事より、第3回優秀論文賞について、大会での受賞者(安原瑛治会員)挨拶は本人が欠席のため代読になることが報告された。

#### 9. 次期理事会

村上理事長からは、新理事会の陣容が報告された。陪席者として出席していた次期理事からも挨拶があった。併せて、新理事会に向けてそれぞれ引き継ぎ書類を6月1日ま

でに作成することが各担当理事に対して要請された。

最後に、村上理事長より今期理事会向けに退任の挨拶がなされ、理事会は散会した。

## ○第179回理事会議事録

日 時：2024年6月1日(土) 15:00～16:30

場 所（開催方法）：Zoomを使用したオンライン会議

出席者：浅香、安保（書記）、磯田、井上、浦部（理事長）、岡田、奥田、川上、菊池、久野、  
子安、坂口、柴田、清水、杉山、禪野、柳原、和田

欠席者：鳥塚、笛田

陪席者：村上（前理事長）※慣例による

### 〈審議事項〉

#### 1. 理事会の構成と分担

浦部理事長より、新理事の分担が次のとおり提案され、承認された。

（理事長） 浦部浩之

（事務局） 磯田沙織

（会 計） 柴田修子

（会報編集） 安保寛尚 川上英

（年報編集） 奥田若菜 菊池啓一 久野量一

（大会支援） 井上幸孝 笛田千容

（大会運営） 岡田勇 鳥塚あゆち

（東日本研究部会） 柳原孝敦

（中部日本研究部会） 浅香幸枝

（西日本研究部会） 禪野美帆

（研究部会総合企画） 子安昭子 清水達也 杉山知子

（ウェブサイト・ニュース配信） 和田毅

（学術会議・国際交流） 坂口安紀

地域研究部会について、前年度の春に早期キャリアセミナーが合同研究部会として開催され、またその継承が期待されていることを踏まえ、この運営を担う「研究部会総合企画」を新設し、清水理事が主任に就いた。これに伴い、各地域研究部会については、「研究部会総合企画」によるバックアップ体制を整えつつ、これまでの2名体制から1名体制に変更した。大会に関わっては、「大会企画」と「大会担当」の名称をそれぞれ「大会支援」と「大会運営」として混乱を招かないようにした。

#### 2. 運営委員の任命

浦部理事長より、次の運営委員の任命が提案され、承認された。

（理事会総務） 大場樹精

（事務局） 洲崎圭子

（中部日本研究部会） 丹羽悦子

（西日本研究部会） 福岡真央

### 3. 入退会

磯田理事より、3名の入会申請があったことについての報告と提案があり、3名の入会が承認された。

### 4. 学会ウェブサイトに掲載の事務局連絡先の変更

磯田理事より、学会ウェブサイトに掲載されている事務局連絡先について、入会申し込みの受付窓口が国際文献社となっていることを考慮し国際文献社に変更することが提案され、承認された。

## 〈報告事項〉

### 1. 事務局

磯田理事より、前理事から年報、会報など、電子化前のものが入った段ボールを引き継いだこと、年会費について、クレジット決済およびコンビニ決済の準備が進められていることが報告された。

### 2. 会計

柴田理事より、学会資金を前理事から引き継いで移転するため、口座の開設準備を進めていることが報告された。現状、予算はかなり積み上がっていて、二つの口座に分けて運用されているが、個人名義で運用することのリスクや、近年の金融機関の監視強化を踏まえて、今後検討が必要とされた。

### 3. ウェブサイト・ニュース配信

和田理事より、前理事からの引き継ぎはこれからであると報告された。

### 4. 年報

菊池理事より、『年報』の原稿募集の案内を学会ウェブサイトに掲載したことが報告された。

### 5. その他

浦部理事長より、学会の中長期課題として以下の6点が示され、共有された。

- 1) 会員数が減少傾向にあることへの対応、および、現在の積み上がった資金の有効な活用策を検討する。
- 2) 他学会で実際に発生している事例に鑑み、学会報告ペーパーの盗用、盗作などの倫理規程違反に対して、管理や対処の手続きを定める規程の作成が必要になっている。
- 3) 地域研究部会について、コロナ禍からオンライン開催となっているが、そのメリットとデメリットを踏まえつつ、開催時期や形態について検討する。
- 4) 早期キャリア支援に関わって、第45回定期大会では食事会やポスター発表が行われ一定の意義が認められたが、今後の大会での継続や活動のあり方について検討する。
- 5) 『会報』の「新刊紹介」を『年報』の「書評論文」に統合する、あるいは『年報』に新たな「書評」カテゴリーを設けるといった案が前理事会期よりあるが、若手の執筆者にとってのメリットとデメリット、年報編集の負担増なども考慮しつつ、具体的な検討を進めていく。
- 6) 定期大会に関して、開催校それぞれの事情に十分に配慮した対応が不可欠であり、理事会と実行委員会の協力体制や実務分担を万全のものにしていく。

- ・岡田理事より、次回の定期大会について、会場使用料の免除および国際会議助成を受ける条件を理由に、名古屋大学国際開発研究科と共催にしたいとの提案があり、承認された。なお、非会員による研究報告については、報告者は会員に限定されるとの原則も勘案しつつ、適切な対応を取ることとした。

## 2. 第45回定期大会の開催

2024年5月25日(土)と26日(日)、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、第45回定期大会が開催された。天候にも恵まれ、両日合わせると190名以上の参加者が、7つのパネルと4つの分科会、そして基調講演やシンポジウムに参加した。懇親会にも全参加者の半数以上が参加し、盛会だった。

1日目午後の、オックスフォード大学名誉教授 Alan Knight 氏による基調講演 (“Latin America since 1968: History and Historiography”) には、100名近い参加者が集まった。約60分の講演の後にはフロアから多くの質問やコメントがなされ、質疑応答は予定されていた15分を超えるほどの盛り上がりとなった。また、2日目午前のシンポジウムは、例年とは趣向を変え、「プロレス／ルチャ・リブレが映し出すラテンアメリカと日本」というタイトルのもとで、現役のプロレスラーであるウルティモ・ドラゴン氏をゲストとして招いて実施した。懇親会(十二次会)の翌朝という不利な時間設定にもかかわらず、80名近い参加者に恵まれ、かつ多くの質問・コメントも出て、盛況であった。

その他、新たな試みとして、受付、書籍ブース、休憩スペースに隣接するオープンスペースに、会員・非会員の院生および学部生によるポスター発表の場を設け、2日目の昼休みに5名の発表者が質疑に応じるポスターセッションを実施した。

また、前大会同様、専門業者に委託した託児室と、小学生以上の子供が待機できる親子休憩室をキャンパス内に設置した。利用者は多くはなかったものの、確実に需要があるということが再確認された。キャンパス内に部屋を確保する難しさもあり、開催校によってはやり方を変える必要があるかもしれないが、今後の大会も、子育て世代の会員が臆することなく子供を連れて参加できるようなものになることが望ましい。

今大会は、対面・オンライン併用で実施された明治大学における前年度大会のノウハウを継承しつつも、多くの研究者が一堂に介して討論するときの緊張感や、研究発表後に三々五々おこなわれる立ち話こそが学会大会の醍醐味であるとの考えに基づき、敢えて全面対面形式で実施した(事務局の運営による総会を除く)。実行委員長としては、そうした緊張感や立ち話に触れることができたので大会は成功したと思いたいが、オンライン併用開催でないことによって参加できなかった方もいらっしゃるはずで、そうした方々には心からお詫び申し上げたい。また、発表用のPCの設置等が円滑に進まず、貴重な発表の時間が短くなってしまったセッションもあった。そのような不便をおかけしたことについても、お詫び申し上げたい。

最後に、そのような不便や不備にもかかわらず、当日参加することで大会を盛り上げていただいた方々には、厚く御礼申し上げたい。そして、1年以上にわたる大変な準備と当日の運営に真摯に携わっていただいた実行委員のみなさまには、感謝の言葉も見つからない。本当に、どうもありがとうございました。

大会実行委員長：川上英



### 3. 第45回定期大会総会報告

日本ラテンアメリカ学会第45回定期大会総会が、2024年5月25日(土) 17時21分より、慶應義塾大学日吉キャンパス来住舎1階シンポジウムスペースにて開催された。配布資料は、①2023年度事業報告、②2023年度会計決算(案)および監査報告、③2023年度理事選挙管理委員会報告(岩村理事)④次期(2024-2025年)理事長候補および増員理事候補報告、⑤2024年度事業計画(案)、⑥2024年度予算(案)の計6点である。

1. 開催校の川上英実行委員長が総会の開会を宣言した後、定足数の確認が行われた。正会員・シニア会員の委任状146通のみで、正会員及びシニア会員総数(508名)の5分の1以上という会則で定められた定足数に達していることが報告された。

続いて議長の立候補を募ったが、立候補がなかったため、理事会から牛田会員が議長に推薦され、承認された。書記には鳥塚会員、神崎会員が推薦され、それぞれ承認された。これをもって議長が牛田会員に交代した。

2. 配布資料の議案1に基づき、村上勇介理事長より2023年度事業報告が以下の通り行われた。

- (1) 定期大会の準備と開催

第44回定期大会2023年6月3日、4日に明治大学駿河台キャンパスで開催し、第45回定期大会(2024年5月25日、26日慶應義塾大学日吉キャンパス)の準備を行った。

- (2) 地域研究部会

いずれもオンライン開催で東日本部会は2023年12月2日、中部日本部会は2023年12月16日、西日本部会は2024年2月17日の日程で1回ずつ研究部会を開催し、2024年4月13日には合同研究部会(早期キャリア研究者セミナー)を開催し、盛況であったと報告を受けた。オンライン方式により、所属地域を越えて活発な議論がなされた。

- (3) 『ラテンアメリカ研究年報』

第43号(2023年7月)の刊行と第44号刊行の準備(電子化の検討)を行った。第44号では、査読が通り採択された論文に関しては、すでに公開している。

- (4) 『会報』

第141号(2023年7月)、第142号(2023年11月)、第143号(2024年3月)を刊行した。第141号刊行の準備(電子化の検討)を行った。電子媒体への完全移行を実現し、フォーマットも変更した。

- (5) ウェブ関連

ウェブサイトに学会関連情報を掲載した。またウェブニュース配信については、約1年間(2023年5月30日~2024年5月18日)に合計99件の各種ニュース(講演会・セミナー・シンポジウム・研究会・『レポート』『時報』等発刊・学会関連業務・新刊情報・公募情報等)を提供した。

- (6) 学術会議・国際交流

学術交流では、地域研究コースシウム(JCAS)年次集会(2023年11月18日、東京外国語大学・ハイブリッド)および地域研究学会連絡協議会(JCASA)年次総会(2023年12月16日、オンライン)に出席し、連携・協力を続けた。

早期キャリア支援制度（研究奨励のための1件20万円）の運用を継続し、1件の応募があった。

(7) 会計

会計については、別途、会計担当理事及び監事より報告がなされる。

(8) 事務局運営

1年間（2023年5月30日～2024年5月18日）に、新入会員12名、退会会員9名、除名会員6名となり、2024年5月18日現在の会員総数は508名となっている。

(9) その他

『ラテンアメリカ研究年報』のJ-STAGEへの掲載（第43号）を行った。

EBSCO社へ『ラテンアメリカ研究年報』の情報提供を行い、データベースが公開された。

審議の後、2023年度事業報告は賛成多数（挙手式）で承認された。

承認後、優秀論文賞の授賞式が行われた。鈴木選考委員長より安原会員に賞状と賞金10万円を渡すことを報告し、安原会員は現在イギリスに留学中で参加が叶わなかったため、研究内容と今後の抱負に関するスピーチが村上理事長により代読された。

3. 配布資料の議案2に基づき、近田亮平会計担当理事から2023年度会計決算の報告が行われた。

決算のいくつかの点に関して以下の説明があった。

- (1) 支出の部の編集印刷費について、今後は年報をオンライン公開とするが、43号は紙媒体での公開だったため支出があった。
- (2) 支出の部の若手支援補助費は、昨年の早期キャリアイベント時の昼食代として支出した。
- (3) 昨年度に初めて託児補助費を支出した。
- (4) 今年度繰越は昨年度の繰越より92万円ほど多くなっている（明治大学からの補助の分）。

引き続き、藤井監事より会計監査の結果、適切な会計処理が行われたことを確認した旨の報告があった。以上の報告を受け、2023年度の会計決算は承認された（詳細については別掲の決算概要を参照）。

監査の場での議論として、会場内・外の託児補助費で子供一人当たり1万円を補助しているが、この金額については、今後学会で議論の必要があることが述べられた。

4. 配布資料の議案3に基づき、岩村健二郎選挙管理委員長から2023年度理事選挙管理委員会の報告が行われた。

委員会活動報告のあと、磯田沙織、奥田若菜、浦部浩之、柴田修子、安保寛尚、井上幸孝、菊池啓一、岡田勇、笛田千容、川上英、子安昭子、禪野美帆、坂口安紀、柳原孝敦、和田毅の15名が当選者として確定したとの報告がなされ、最後に委員会活動と選

挙結果の総括がなされた。投票率は23.23%で、2022年時（24.52%）と比べとくに大きな変化はなく、およそ20%台前半で推移している。選挙管理委員会からの議案は賛成多数にて承認された。

今回の選挙は全面オンラインで実施された。開票作業もオンラインで実施し、とくに問題はなかったことが報告された。

理事就任依頼を、従来の会員個人名から管理委員会名義からの発出に変更した。辞退に際しての心理的圧迫感等に配慮したため。

5. 配布資料の議案4に基づき、村上理事長より、次期（2024-2025年）理事長候補および増員理事候補についての報告がなされた。

理事長・理事選出規則第4条の2に基づき、4月27日にオンライン会議で次期理事長・理事選考委員会が開催され、審議の結果、浦部会員が次期理事長候補に選出され総会就任後に任期を開始すること、また同委員会において選出する5名以内の理事について審議が行われ、浅香幸枝、久野量一、清水達也、杉山知子、鳥塚あゆちの5名の会員が次期増員理事候補とし確定し、総会承認後に任期を開始することになるとの議案について、賛成多数にて承認された。監事の選出が行われ、久松佳彰会員と三浦航太会員が監事として任期を開始することが承認された。

6. 配布資料の議案5に基づき、2024年度事業計画案が、村上理事長より以下の通り提案された。

- (1) 定期大会の準備と開催

2025年6月前半を目処に第46回定期大会（名古屋大学東山キャンパス）を開催する。実行委員長は岡田勇大会担当理事が務める。

- (2) 地域研究部会

研究部会は、これまで通り、東日本部会、中部日本部会、西日本部会をそれぞれ年度内に1回と合同部会開催する。また、合同で早期キャリア研究者セミナーを年度内（秋季など）に1回開催する。

- (3) 『ラテンアメリカ研究年報』

第44号を刊行する（2024年7月ないし8月、電子版）。締め切りを9月末、12月末、3月末、6月末とし、投稿ごとに査読・出版（J-STAGEへの掲載、Doiも自動付与）を行う。7月から6月を編集年とし、号数は従来のを継承する。ページは公開順に自動付与される。

- (4) 『会報』

第144号～第146号を電子版で刊行する（2024年7月、11月、2025年3月）。個人情報保護に十分に注意する。

- (5) ウェブ関連

これまで通り、ウェブサイトの管理運営を行い、ウェブニュースの配信を行う。

- (6) 学術会議・国際交流

学術会議への参加のほか、早期キャリア研究者支援（研究奨励金20万円支給）も継続している。

(7) 会計

会計については、2024年度予算の執行、2024年総会への決算報告と監査報告を行うとともに、2025年度予算計画を立案する。

(8) 事務局運営

入退会会員等の名簿管理を行うとともに、外部からの問い合わせに対応する。

(9) その他

会費納入に関して、事務局へのこれまでの負担の観点から振込用紙送付の撤廃案が出たが難しいことが判明したため、納入のクレジットカード式を提案した。質問が挙がり、大学から要請されている領収書への大学名の記入など、システム面での要望があった。

早期キャリアの会員から、早期キャリア間の相互ネットワークの構築、他の組織との交流のための基盤づくりを行いたいと提案があり、会員に承認が求められた。

以上の提案を受け、それぞれ審議が行われ、賛成多数で承認された。続いて、その他の事業計画案についての審議が行われ、賛成多数で承認された。

7. 配布資料の議案6に基づき、近田会計担当理事より、2024年度予算案が提案された。予算のいくつかの点に関し以下の説明があった。

(1) 次期会計担当理事が関西在住者のため、口座の引き渡しを考慮し口座整理を行った。

口座整理の際の利息数百円が議案書の収入の部には未記載であるが、追加される。

(2) 支出の部の編集印刷費に関しては、電子媒体を進めているが、不測の事態に備えて80万を計上している。

(3) 定期大会費はすでに振込を済ませている。

(4) 若手支援補助費は、コロナ禍では使用が少なかったが、以前の予算を鑑みて計上している。ポスター発表への補助も含まれる。

以上、2024年度予算案は賛成多数で承認された。

8. 以上をもって、議長が閉会を宣言し、日本ラテンアメリカ学会第45回総会は終了した。

村上勇介（理事長）

《2023年度決算》 (2023年4月1日～2024年3月31日)		《2024年度予算》 (2024年4月1日～2025年3月31日)	
<b>収入の部</b>	<b>決算</b>	<b>収入の部</b>	
会費収入	3,254,336	会費収入	3,300,000
年報売上げ	22,365	年報売上げ	25,000
雑収入（利息等）	180	雑収入（利息等）	200
定期大会返金	254,440		
定期大会補助（明治大学）	62,500		
小計	3,593,821	小計	3,325,200
前年度より繰越	12,454,233	前年度より繰越	13,375,028
<b>合計</b>	<b>16,048,054</b>	<b>合計</b>	<b>16,700,228</b>
<b>支出の部</b>		<b>支出の部</b>	
事務局経費	500	事務局経費	10,000
事務委託費（会員管理）	629,354	事務委託費（会員管理）	1,000,000
郵送・通信費	126,822	郵送・通信費	200,000
編集印刷費 (年報43号・会報No. 140～142)	683,870	編集印刷費 (年報44号・会報No. 143～145)	800,000
選挙管理委員会経費	0	選挙管理委員会経費	152,722
ホームページ管理費 (アルバイト代含む)	140,370	ホームページ管理費 (アルバイト代含む)	200,000
理事会経費	0	理事会経費	50,000
定期大会費	950,000	定期大会費	950,000
研究部会助成	0	研究部会助成	20,000
雑費（振込手数料）	5,060	雑費（振込手数料）	10,000
若手支援補助費	14,250	若手支援補助費	1,000,000
託児補助費	70,000	託児補助費	100,000
企画費	0	企画費	500,000
予備費	52,800	予備費（J-STAGE掲載）	500,000
小計	2,673,026	小計	5,492,722
次年度への繰越	13,375,028	次年度への繰越	11,207,506
<b>合計</b>	<b>16,048,054</b>	<b>合計</b>	<b>16,700,228</b>

## 新理事長あいさつ

このたび会員の皆様からのご負託を頂き、新理事長に就任することになりました。率直なところ、私がこの職に相応しいのか、自問しました。私は中規模私大で、学部教育を中心に生活の糧を得ています。中核的な大学で研究活動や研究者養成に尽力されている方々に比べると、日本の学术界や高等教育界を取り巻く最新の政策的な動向や課題に関する情報にふれる機会が限定的なのは否めません。ただ他方で当学会は、様々な研究機関において、様々な立場から、様々なかたちで教育研究に携わっている幅広い層の人々で構成されているとも認識しています。日本におけるラテンアメリカ研究の足場は、そうしたすべての人々の集合的な努力によって守られてきました。私もそうしたうちの一人ではあるので、何か引っかかる気持ちはあるもののそれは封じ、この職務をお引き受けすることにしました。私が見落としてしまうこと、あるいは気づき得ないことなど色々出てこようかと思えます。ぜひご教示ください。2年間、何とぞよろしくお願い申し上げます。

5月に開かれた大会の1週間後、新メンバーによる最初の理事会を開催しました。その際、当学会が抱える様々な課題についても話をしました。多くの方が実感されているとおり、大学における人文社会系の研究環境は厳しさを増しています。また、最近の円安傾向は国外での調査や学会参加をやりにくいものにしており、これが一過性のもので終わればよいのですが、もしかすると現地調査や留学の進め方について再考を迫られてくるのかもしれない。こうした不確実性の中で、私たちはラテンアメリカ研究を発展させていく必要があります。とくに新たな人材の育成や、直接的な表現をあえて用いれば、大学などにおける常勤・非常勤のポストの確保（死守）も重要な課題です。

こうしたことを念頭に、学会の活性化に地道に取り組んでいきたいと思えます。年1回の大会は学会の中核的な活動ですが、その会場を引き受ける大学の事情は様々です。教室使用料やオンライン環境を含む施設の状況、それを支える人的資源にも大きな差があり、あれこれの制約も大きくなっています。そうした実情には十分に配慮し、関係者に過剰な負担を強いることのない、持続性のある大会の企画運営に努めていきたいと思えますし、また会員の皆様のご理解も賜りたく存じます。ここ数年、私たちはパンデミックにおおいに苦しめられましたが、その過程でオンライン会合のノウハウも学びました。3つの地域部会に関しては、その経験を生かし、日程やコストなどの理由で大会への参加が困難だった方々にも研究報告の機会をご提供できるよう、さらなる工夫を重ねていきたいと思えます。前理事会期に始まった学会誌『ラテンアメリカ研究年報』のオンライン化を軌道に乗せ、研究成果発信の迅速化と活性化を図ることに努めます。同じく前理事会から期待されている早期キャリア支援に関しては、持続性と実現可能性に留意しつつ、よい方法を探って参ります。

そして、学会が抱えている資金の扱いについて、より踏み込んだ検討をしていきたいと思えます。一定年齢以上の会員の方はご存じのとおり、学会事務センターの破産（2004年）で、会計業務などを委託していた約300に上る学会の一つとして当学会も、多額の預け金が回収不能になりました。この苦い経験から歴代の理事会は会費の扱いに慎重を期し、健全財政を維持してきましたが、その分、学会の資産が積み上がり、任意団体としてはやや不相应な規模に達している面があります。この資産を有効活用する道を探る

ことは不可避の課題であり、端的に言えば、健全な圧縮（単年度決算で見た場合の緩やかな赤字化）を図っていかねばなりません。ただし、静的に見れば資金は潤沢と言えますが、社会構造の変化に比例した将来的な会員数の見通し、あるいは諸種のコスト増についてもよく考えておく必要があります。そのバランスが非常に悩ましいのですが、よい方策を熟慮していきたいと思います。

偶然ではあるのですが、新理事会のメンバーは女性10人、男性10人です。初めて理事になられた方も数人おられます。これらの多様性のある新理事の方々のお力添えを賜りつつ、様々な立場に置かれている会員の方々のすべてが参加することへの意義を感じてくださるような学会を目指していきたいと考えています。

浦部浩之：獨協大学

## 4. 第45回定期大会・研究発表など

### 〈基調講演〉

#### ○Latin America since 1968: History and Historiography

Alan Knight (Emeritus Professor, University of Oxford)

講演は三部構成でなされた。第一部は、講演者の自分史。第二部は、講演者が初めてラテンアメリカに足を踏み入れた1968年から現在に至るまでのラテンアメリカをめぐる歴史叙述のあり方の変遷について。そして第三部は、同じ時期のラテンアメリカの歴史そのものの概観である。

第一部では、イギリス帝国史を専門とするジャック・ギャラガー（日本ではふつう「ジョン・ギャラハー」として知られる）に感化されてラテンアメリカ史に関心を持つに至ったこと、そして、1960年代はキューバ革命の影響もあって珍しくイギリス政府がラテンアメリカ研究者の育成に力を入れていたため、1968年に政府からの奨学金を得てラテンアメリカ史の博士課程を始めることができたことなどが語られた。

第二部では、まず、これまでのラテンアメリカ史へのアプローチの仕方に大きく三つの波が認められることが述べられた。一つ目は、1960年代までの、国民国家や政治システムや偉人に焦点を当てた「上からの」政治史のアプローチ。二つ目は、1960年代から1980年代にかけての、国より下位レベルの地域や偉人以外の民衆に焦点を当てた「下からの」社会経済史のアプローチ。そして三つ目は、1990年代以降の、それまで見落とされてきたテーマや社会集団（スポーツ、余暇、女性、ジェンダー、先住民など）に焦点を当てたいわゆる「新しい文化史」的アプローチである。講演者によれば、そうした三つの波の展開に合わせて、主に五つのグランドセオリーが影響力を争ってきた。講演者が研究を始めた頃に隆盛を誇っていたのが、マルクス主義と従属論、そしてその二つに反対する近代化論である。その中で唯一形を変えながら生き残っているマルクス主義への反対として、その後影響力を増してきたのが四つ目の新古典派経済学であり、さらに最後に、ポストモダニズムと「言語論的転回」の産物として出てきて流行したのが「新しい文化史」である。そのようにまとめた上で、講演者は、「時代ではなく問題を研究せよ」というアクトン卿の言葉を引いて、どれか一つのグランドセオリーが全ての問いへの答えを出してくれることはないのだから、歴史家

は自分の取り組む問いごとに有効なグランドセオリーを取捨選択して使うべきであると説いた。

第三部では、まず、ラテンアメリカはかつての植民地支配の負の遺産により経済的後進性と権威主義体質から抜け出せないとか、欧米に従属するラテンアメリカは低開発状態に置かれていてそれをを変えるには革命しかないとするような静的な見方が否定された上で、実際には堅実かつ重要な変化があったとして、大きく以下の四点に分けて説明された。一つ目は民主化、二つ目は経済成長である。三つ目は、経済の変化に伴う、ラテンアメリカ外（とくに米国）への移民の増加とラテンアメリカ内での人の移動の増加である。そして四つ目は、識字率の増加や女性の社会進出や信仰の多様化などの社会変化である。最後に、講演者は、歴史学のみならず社会科学全般は「事後の」説明の学問であるから今後の予測はできないとしつつ、政治家やメディアの発する誤った情報を正すことはできるし重要であると述べた。そして、余所者である日本人によるラテンアメリカの研究は、それが明敏かつ根気強いものであれば、現地の人には見えないものを明らかにすることができるかもしれず、またラテンアメリカに疎い日本の一般の人々にラテンアメリカの実情を解説できるという点でも、とても価値のあるものであるというエールを私たちに送って講演を締め括った。

## 〈分科会1〉政治

司会：伏見岳志（慶應義塾大学）

本分科会では、3名の会員による報告がおこなわれ、およそ20名が参加した。第1報告はベネズエラ・ガイアナ間の領土問題を扱った歴史的な考察であり、第2報告はベネズエラからの難民児童のトリニダー・トバコでの教育についての現地調査にもとづく分析であった。視点は異なるが、どちらもベネズエラと周辺諸国との最近の課題について扱っており、補完的な内容であった。第3報告はペルーの遺跡の保存と利用に関して現地調査や報告者自身の実務体験に基づく分析で、写真素材も豊富な詳細な報告であった。政府の制度的問題点と、市民団体の活動との関係に関心を持つ点で、第2報告と視点を共有している。参加者からの質問も多く、予定時間を超過して、充実した議論が交わされた

### ○ベネズエラ・ガイアナ国境問題の歴史的考察

——なぜエセキボ川西岸は係争地になったのか

山田篤美

[討論者] 佐藤正樹（慶應義塾大学）

近年のベネズエラ・ガイアナ国境問題の焦点であるエセキボ川西岸は、19世紀のイギリス帝国の膨張主義の舞台であり、その紛争はアングロ・ベネズエラン国境紛争として知られている。本報告ではアーカイヴ調査による19世紀の多くの地図を使い、イギリスが産金地やオリノコ河口領有の動機をもって英領ギアナの版図を急拡大していく過程を解説し、モンロー宣言や仲裁裁判を経てイギリスがエセキボ川西岸を獲得したことを説明した。両国の領有権の主張の根拠なども紹介した。討論者の佐藤正樹会員からは地図の政治性や恣意的扱いについてのコメントがあり、仲裁裁判における国境紛争の前例に関する有意義な質問があっ



た。会場からは仲裁裁判におけるベネズエラの立場やベネズエラ独立以前の係争地における入植状況などの質問があり、また、この国境紛争における米国の関与は、当時の米国のラテンアメリカ外交の文脈で理解できることが指摘され、興味深い討論や質疑応答となった。

○移民・難民の母語とエスニック・アイデンティティ教育

——トリニダード・トバゴにおけるNGO・教育機関の取り組み

鈴木美香（福岡大学）

[討論者] 工藤瞳（慶應義塾大学）

本報告では、トリニダード・トバゴ（TT）でベネズエラ移民・難民の教育支援に携わる関係者等への聞き取り調査を基に、①母語・アイデンティティ教育に対する取り組み、②同教育を実施するメリット、③関係者が直面する課題について提示した。①に関しては、国際機関等によるオンライン教育のほか地元大学による教員研修や内容統合型学習の実施に向けた準備等を紹介した。②については、祖国との関係維持に加えTT人の国際化や相互理解、TTの発展に役立つといった見方があることを示した。③に関しては、政府と支援・教育関係者間の意思疎通の欠如、移民・難民全員を対象とした教育制度の早急な確立の必要性、教室・機材・文房具等の不足を挙げた。討論者および会場からは、移民・難民の属性、彼らに対するTT政府の姿勢、彼らとTT人の関係、アイデンティティ教育の詳細等に関し質問があった。また、周辺国の事例との比較について提案を受けるとともに、移民・難民受入れでベネズエラと歴史的な繋がりが深いラテンアメリカ諸国とTTの相違点について指摘があった。

○Patrimonio arqueológico y política: Problemas y posibilidades de los sitios arqueológicos como capital político en Lima, Perú

Daniel Dante Saucedo Segami（Universidad Ritsumeikan）

[討論者] 渡辺裕木（慶應義塾大学）

Esta ponencia fue presentada con el objetivo de explorar los problemas políticos y administrativos en torno a los sitios arqueológicos en Perú, particularmente en áreas urbanas como la capital Lima. El caso de estudio presentado aquí es el sitio arqueológico Huaca Melgarejo, en el distrito de La Molina, un área residencial de la ciudad de Lima. Debido a que este distrito tiene solo dos sitios monumentales, siendo Huaca Melgarejo uno de ellos y el más emblemático por su facilidad de acceso y por tener un parque en sus límites, existen muchos intereses de varios actores sociales (i.e. Ministerio de Cultural, Municipalidad de La Molina, vecinos, etc.) con diferentes perspectivas de uso. Mientras que las autoridades nacionales y locales consideran que el sitio debe convertirse en un atractivo turístico que congregue a muchos visitantes, la asociación de vecinos local quiere mantener el aspecto residencial de la zona, oponiéndose a una visión comercial del sitio arqueológico, y planteando más bien una mejora de las áreas verdes. Como consecuencia, existen fricciones entre visiones distintas de los que se desea hacer con el sitio arqueológico, lo que ha devenido en problemas de cómo protegerlo.

Tomando como base este estudio de caso, la comentarista Yuki Watanabe comparó la situación con

el manejo de sitios arqueológicos en México, donde un fuerte nacionalismo ha permitido el estudio y conservación de varios sitios en áreas urbanas. En cuanto a las preguntas del público, destacó la necesidad de entender el sistema de participación ciudadana en el control de las actividades propuestas por las autoridades en Perú, un elemento que los limeños recién están aprendiendo a usar.

## 〈分科会2〉文学①

司会：Héctor Sierra（東京大学）

○Contar al narco desde Bolivia y Perú: El nombre elegido (2023) de Homero Carvalho y Aullar las sombras (2024) de Charlie Becerra

Danilo Santos López (Pontificia Universidad Católica de Chile)

[討論者] 野内遊（静岡大学）

El profesor **Danilo Santos López** disecciona las producciones literarias de un novelista avezado (el boliviano **Homero Carvalho**) y de un cronista joven y prometedor (el peruano **Charlie Becerra**) que con sus aportaciones comparten un segmento narrativo en ese gran corpus literario inspirado por, o que trata de explicar, el fenómeno del tráfico de narcóticos.

Los personajes en cuestión, Valentina Sieglar en el *El nombre elegido* (2023) de Homero Carvalho y Humberto Vargas Pizango en *Aullar las sombras* (2024) de Charlie Becerra parecen relatar el comienzo (y el desenlace ulterior) de dos de los emprendedores en la línea de producción y transporte de los narcóticos. Ambos personajes son los pioneros que llevaban o facilitaban el comercio ilícito de las drogas, los que ayudaban a crear las líneas de suministro para que Pablo Escobar creara su imperio.

Mientras tanto, podemos pensar, los personajes de la sicaresca parecen estar al final de ese proceso: cuando los emprendedores “han coronado”, se han enriquecido y se empecinan en reconstruir la realidad a su acomodo con asesinatos o masacres. Los ejecutores de los asesinatos son esos lazarillos con ametralladoras que se convierten en los protagonistas de la sicaresca. Y los verdugos que ejecutan el demicidio en los campos roturados de Colombia aparecen en las novelas que se estudiarían en la siguiente ponencia.

○Literatura de la violencia paramilitar colombiana: el río como locus del residuo y la memoria

Ingrid Urgelles Latorre (Pontificia Universidad Católica de Chile)

[討論者] Héctor Sierra（東京大学）

La profesora **Ingrid Urgelles Latorre** propuso en el texto de su ponencia una taxonomía para “la novela paramilitar”: sicaresca antioqueña, narcoliteratura, novela de crímenes, relatos de desplazados y novelas que hacen referencia a masacres paramilitares. Sin embargo, “literatura del narcotráfico” podría ser un tema más incluyente.

Su análisis encuentra puntos en común en las novelas *En el brazo del río* (2006) de **Marbel Sandoval Ordóñez** y *Las aguas turbias* (2014) de **Yesid Toro**. El uso de la primera persona, la selección de personajes muy jóvenes para relatar los acontecimientos, la voz testimonial de las víctimas y por supuesto la descripción

del río Magdalena como espacio ficcional y metafórico hacen que ambas novelas complementen la espantosa realidad vivida por los campesinos en la región conocida como el Magdalena Medio.

En ambas aparecen los paramilitares, los escuadrones de la muerte. En *Las aguas turbias* se les menciona como “el grupo”, la Organización, “los macetos”, o simplemente el MAS. En *En el brazo del río* se mencionan “los macetos”. Esto por fin explica el porqué del nombre rural de los grupos de asesinos que operan a veces enmascarados: se llaman macetos (y no macetos) pues son miembros o simpatizantes de una organización clandestina antiguerrillera autodenominada MAS (acrónimo de Muerte A Secuestradores). Esta organización habría sido fundada hacia 1981 cuando los grupos guerrilleros decidieron dejar de asaltar bancos y, a cambio, secuestrar a miembros de la recientemente establecida mafia del narcotráfico o a sus familiares.

Si la estética de Fernando Vallejo (*La Virgen de los sicarios*, 1994) es un “realismo sucio” (Santos López), el estilo de Marbel Sandoval Ordóñez parece ser un *realismo limpio*, prístino, inocente, aunque uno de los personajes relate su testimonio desde la irrealidad. *En el brazo del río* explica de manera muy humana y conmovedora ese segmento de la violencia paramilitar en el horroroso fondo de la violencia causada por el narcotráfico en Colombia.

○El culto a las “almitas milagrosas”, víctimas de feminicidio en Bolivia, como un instrumento creativo para el cambio social

Irina Soto-Mejía (創価大学・早稲田大学)

[討論者] 山本昭代 (慶応義塾大学)

La profesora Irina Soto-Mejía se refirió a la violencia de género en Bolivia. Las mujeres bolivianas continúan siendo víctimas de violencia a pesar de que ha habido cambios pertinentes en la legislación y en el lenguaje que han ayudado a empoderar a las mujeres.

Entre los símbolos de esa agresión constante destacan tres mártires: la Quemadita, la Niña Patricia y la Shirley quienes hacen parte de un altar de santas no canonizadas que interceden por los mortales y, podemos suponer, hacen milagros o al menos ayudan a sus devotos.

El culto a las *almitas milagrosas* permite desarrollar un *duelo colectivo* que es esencial para la comunidad; es imprescindible llorar las *vidas no llorables* en el espacio público. El arte y la literatura proporcionan “momentos de transformación” que nos permiten reconsiderar y repensar nuestra vida, imaginar un mundo más justo, *para todas*.

### 〈分科会3〉抵抗

司会：梅崎かほり（神奈川大学）

本分科会では、3名の会員による研究報告が行われた。加藤会員からはブラジルの「カーニバル法」がサンバ音楽に与えた影響について、鋤柄会員からはマヤ系の女性作家の作品にみる表現技法としての翻訳について、川又会員からはベネズエラ都市部における母乳哺育政策と低所得層の女性によるその実践のあり方について、それぞれ具体的な事例研究の成果が発表された。地域・分野ともに三者三様でありながら、いずれの報告者も現地社会に深く分

け入ったフィールドワークを実施している点で共通しており、そこで得られた貴重な資料と独自性に富む分析の視点が提示されたのが印象的であった。討論者および会場との質疑応答では、分科会のテーマである「抵抗」をキーワードとした活発な議論が交わされた。各報告の要旨は以下のとおりである。

○サンバの音楽はカーニバル法によってどう変わったのか

加藤 勲

[討論者] 石橋純 (東京大学)

ブラジルのサンバカーニバルは、リオ市とサンパウロ市を中心に開催され、エスコーラという団体がサンバを表現するイベントである。本発表では両市が施行した「カーニバル法」による、エスコーラのサンバ音楽への影響を報告した。この音楽は不協和音を評価せず、打奏、踊り、肉声での歌唱を評価し、リズムの一致と維持を調和とする、「音楽理論」に従わない音楽である。これらは「カーニバル法」によって整備された社会で研鑽された特徴である。この特徴を現地で録音した音源を波形解析したデータ分析から証明した。討論者の石橋会員から、これまで、ノリやグルーヴなど、定義の曖昧な言葉で語られてきた音楽の要素を実証した研究とご指摘頂いた。会場から①「カーニバル法」施行以前のサンバとの比較、②ブラジルの演奏者が自身を鼓舞する、音楽の普遍的な特徴の提示、③史料批判を通した「カーニバル法」整理などの3点を行うべきだとコメントをいただいた。

○「痛み」とはなにか。ツォツィル詩人スシ・ベンツルルの表現する身体性

鋤柄史子 (バルセロナ大学大学院博士後期課程)

[討論者] 藤田護 (慶應義塾大学)

ツォツィルの詩人スシ・ベンツルル (Susí Bentzulul、サン・フアン・チャムラ (メキシコ、チアパス州) 出身、1995年生) は、先住民の村落に根強く残る父権主義に対してフェミニズムの立場から声をあげている表現者だ。本発表では、二言語の間を行き来する翻訳がある一定の表現技法として作用しうる可能性について検討するため、ベンツルルのスペイン語・ツォツィル語バイリンガル詩集「Tenbilal antsetik. Mujeres olvidadas」(FCE、2023年)のなかの、女性の抱える「vokolil (痛み)」に関する表現に焦点を絞って議論した。討論者やフロアからは、同詩集に読みとれる *olvido* などの他のテーマをどうとらえるか、翻訳の概念に関する指摘、また多言語で創作する作家が世界に現れてきているなかで本作をどのように位置づけるか、など有益な質問やコメントをいただいた。

○暴力を通して再構築される母乳哺育

——ベネズエラ都市部における低所得層女性の行為主体性

川又幸恵 (総合研究大学院大学博士課程)

[討論者] 奥田若菜 (神田外語大学)

本報告では、ベネズエラ都市部低所得層女性の母乳哺育実践を取り上げた。女性による母

乳哺育は、文化や生物学的知識を受け入れて構築されたものとは限らない。そこで、女性自身の経験を基にした再構築過程をみるために、他者との共同性やネットワークと、そこから生まれる抵抗や変化に着目する「行為主体性」概念を用いた。とりわけ、行為主体性が生成される諸条件となる女性の日常生活に存在する暴力に注視した。バネズエラでは母乳哺育推進が活発であり、女性の身体は生物医学的教育や母性主義的な道德教育などの生権力によってその実践も方向づけられている。他方、女性の日常生活には、ジェンダー暴力や医療現場における妊産婦への暴力などが存在していた。彼女たちは暴力とその背後にある社会規範へ抵抗するために、複数の権力のロジックをつなぎ合わせながら、固有の意味を持つ母乳哺育を再構築していた。討論者の奥田若菜会員からは、今後の研究ポイントとして経済的格差から生まれる母乳哺育経験の差異について言及があった。フロアからは、本報告における地域研究の意義やデータ分析に関わる重要な指摘をいただいた。

#### 〈分科会4〉文学②

司会：安保寛尚（立命館大学）

本分科会では、チリ・カトリック大学のチリ文学研究所に所属する二人のチリ人研究者による研究発表が行われた。いずれもチリ現代文学に関わる研究で、アレコ氏は「記録のフィクション」と名付けた、写真や絵、メモ、新聞記事や証明書などが挿入される近年のハイブリッドな作品の特徴について論じた。モレノ氏は、そのような作品が流行する前の、しかし連続性のある特徴を備えるノラ・フェルナンデスの『マボチョ』（2002）について、決定版（2019）における書き換えに注目して論じた。それぞれの討論では、棚瀬氏からはボラーニョをはじめとするラテンアメリカ現代文学の流れとのつながりについて、松本氏からは、作品におけるチリの歴史に名を刻む登場人物のフィクション化についてコメントと質問が寄せられた。参加者は12名ほどであったが、時間的余裕を生かして十分な質疑応答の時間を確保することができ、充実した分科会となった。二人の報告者による要旨は以下の通りである。

#### ○Ficciones de archivo chilenas de la década de 2020

Macarena Areco (Centro UC de Estudios de Literatura Chilena  
de la Pontificia Universidad Católica de Chile)

[討論者] 棚瀬あずさ（東京大学）

En esta ponencia abordé el subgénero de las ficciones de archivo, un tipo de narración híbrida que en las últimas décadas ha ido volviéndose cada vez más importante en Europa y Latinoamérica y que se caracteriza por la presencia de materiales gráficos de distinto tipo, por la yuxtaposición de Historia y ficción y a veces por la autoficción, porque involucra una pesquisa que usualmente ahonda en el pasado familiar y por las migraciones, los viajes o el exilio. En primer lugar, describí brevemente el subgénero y mostré algunos de los tipos de imágenes que aparecen en las obras; luego mencioné algunas teorías sobre el archivo; y finalmente me referí a dos narraciones chilenas publicadas en los dos mil: *Walter Benjamin: la herida de la libertad se abre hacia adentro* (2022) de Rafael Díaz Silva

y *Diario de Japón* (2022) de María José Ferrada. Además de presentar imágenes, en ambas se realiza una pesquisa, en la primera sobre los últimos años de Benjamin y sobre la familia del narrador exterminada en Europa durante el nazismo, en la cual se produce un tránsito desde lo no referencial a la novela, y en la segunda sobre Japón, su literatura, las imposibilidades del lenguaje y el aporte de las imágenes, aunque estas tampoco son capaces de resolver el vacío. En los comentarios y preguntas se habló sobre las novelas latinoamericanas recientes en que hay una pesquisa sobre escritores y sobre la novela híbrida; sobre la historia personal y la colectiva; y sobre la creación de un archivo alternativo al del poder, entre otros temas.

○ Ir y volver a *Mapocho* (2002 y 2019) de Nona Fernández: hacia la ficción de archivo

Fernando Moreno (CRLA-Archivos Universidad de Poitiers,  
Centro UC de Estudios de Literatura Chilena  
de la Pontificia Universidad Católica de Chile)  
[討論者] 松本健二 (大阪大学)

Si bien, en el momento de su publicación la novela *Mapocho* no llamó la atención de la crítica académica, con posterioridad ha sido objeto de agudos análisis que han puesto en evidencia las capacidades de los mundos allí referidos para refractar situaciones y problemáticas vinculadas con dimensiones históricas, sociales y culturales del Chile del presente y del pasado: la construcción e invención de la Historia, la recuperación y experiencia de la memoria traumática, al marco espacial en el que se inscriben dichos procesos y a las subjetividades que lo recorren. Se constata que *Mapocho*, mediante un proceso escritural y ficcional de constante trastrocamiento, no solo propone versiones alternativas de eventos y figuras del pasado y sitúa en el centro de la escena narrativa perspectivas y racionalidades subalternas, sino que también cuestiona algunas viejas certezas acerca del conocimiento del pasado y de la legitimidad de las vías comúnmente aceptadas para acceder a él. Se suscita así una disonancia cognoscitiva: lo acaecido se convierte en probable y lo imaginario reemplaza lo sabido y consabido. Después de varios años de su primera edición, Nona Fernández efectuó una operación de limpieza y de revisión del texto y, en 2019, se publica una versión “definitiva” que incluye un conjunto de modificaciones de distinto orden y factura, una de las cuales, quizás la más destacada, sea su deriva hacia lo que se ha dado en llamar la ficción de archivo. De ahí que en esta ponencia proponga una revisión de *Mapocho* y de su escritura, como proceso y producto, y haga una lectura que, considerando estos cambios y variaciones, aborde ciertos aspectos situados en el nivel del discurso que fundamentan una historia en la que la ficcionalización del archivo, lo fantasmal, la extrañeza y la incertidumbre concurren en la formulación de una propuesta estética donde priman movimiento, heterogeneidad, pluralidad y cuestionamiento. Durante la discusión, el comentador y algunos participantes destacaron la presencia de personajes “históricos”, cuyas caracterizaciones aparecen desvirtuadas, y el nivel de lo fantástico (el narrador post-mortem), como elementos relevantes de esta obra.

## 〈パネルA〉

「ラテンアメリカ文学のブーム」の舞台裏

——出版業、新聞・雑誌、文学賞と小説文学をめぐるネットワーク

[代表者] 寺尾隆吉（早稲田大学）

[報告者] 寺尾隆吉（早稲田大学）

大西亮（法政大学）

浜田和範（慶応大学）

[討論者] 杉山晃（清泉女子大学名誉教授）

『百年の孤独』の刊行を頂点とする「ラテンアメリカ文学のブーム」は、1950年代末から優れた小説作品がスペイン語圏各地で断続的に刊行されたところから発生した現象だが、これがラテンアメリカ全体、さらに世界全体へ広がっていく過程には、様々な文化的・社会的要因が関係した。本パネルでは、アルゼンチンとウルグアイを例に、出版社の刊行戦略、新聞・雑誌における批評活動、公的・私的機関による文学賞の創設といった事象をとりあげ、そこから生まれた文学ネットワークがどのような形でブームの伝播を後押ししたのか具体的に分析した。

### 寺尾報告

「スダメリカナ社と雑誌『プリメラ・プラナ』の連携——『百年の孤独』の成功の内幕」

1967年の刊行以降スペイン語圏全体でベストセラーとなったガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』をめぐる近年の研究では、その商業的・批評的成功の背景に、有力な雑誌や出版社を巻き込む友人知人のネットワークが存在したことが指摘されている。本報告では、『百年の孤独』を手掛けたアルゼンチンの出版社スダメリカナと、同じくアルゼンチンの有力週刊誌『プリメラ・プラナ』の関係に注目し、両者がどのようにこの小説を売り込んだのか、そのいきさつを具体的に検証した。とりわけ、『プリメラ・プラナ』誌がベストセラー・ランキングの公表と「ラテンアメリカ小説」の紹介を組み合わせることで、ブームの土台を作ったことが明らかになった。

### 大西報告

「文芸雑誌『スール』の衰退とホルヘ・ルイス・ボルヘスの世界的成功」

1931年創刊のアルゼンチンの文芸誌『スール』は、同時代の西欧文学の動向をいち早く紹介するコスモポリタニズム精神に支えられ、広くラテンアメリカ諸国の文学者に大きな影響を与えた。しかし60年代に入ると、その影響力にも陰りが見えはじめ、敏腕編集者ホセ・ピアノコと袂を分かったこともあって、ラテンアメリカ文学の「ブーム」においても主導的な役割を果たすことなくその実質的な役割を終えた。本発表では、「時代遅れ」の烙印を押された『スール』の活動にあえて着目し、「ブーム」が生み出された背景をいわば裏側から浮かび上がらせることを試みた。

### 浜田報告

「1960年代のウルグアイにおけるラテンアメリカ文学の受容」

経済危機とキューバ革命の影響を大きく受けた1960年代のウルグアイにおいて、書籍の

発行点数と初版部数は飛躍的に増加した。ラテンアメリカにおける自らの例外性を揺るがす状況下、ウルグアイでは国内文学の振興が図られ続ける一方、同時にきわめて精力的にラテンアメリカ文学の紹介が行われた。本報告では、週刊誌『マルチャ』を中心とした定期刊行物に掲載された批評、ライバル関係にあった二人の文芸批評家、エミール・ドロリゲス・モネガルとアンヘル・ラマの論争、さらには、定期刊行物や批評家と密接に連携していた出版社の活動に着目することで、その受容の特質を明らかにした。

討論者より「1960年代の「ブーム」という現象に新たな資料を駆使して取り組む姿勢は非常に興味深い。この時代に活躍した敏腕代理人カルメン・バルセルスや、コルタサルらが拠点を置いていたパリの重要性に目を向ければ、さらに興味深い研究が可能になると思われる。」とのコメントがあった。

『プリメラ・プラナ』の重要性やアルゼンチンとウルグアイの出版業界、カルロス・フエンテスやファン・ルフォといった作家の位置づけ、「ラテンアメリカ文学」という呼び名などをめぐって様々な質問が出され、予定時間をオーバーして12時40分ごろまで活発な議論が続いた。

## 〈パネルB〉

LGBTの権利保障——ラテンアメリカ先進4か国の歩みと課題

[代表者] 畑恵子（早稲田大学・招聘研究員）

[報告者] 畑恵子（早稲田大学・招聘研究員）

渡部奈々（獨協大学・非常勤講師）

近田亮平（アジア経済研究所）

上村淳志（高崎経済大学・非常勤講師）

尾尻希和（東京女子大学）

[討論者] 菊池啓一（アジア経済研究所）

杉山知子（愛知学院大学）

本パネルで取り上げたアルゼンチン、ブラジル、メキシコ、コスタリカは、LGBTの権利において「先進的」な国である。だが今もなおLGBTの人々をめぐっては包摂と排斥という二つの力のせめぎ合いが続いている。パネルでは4か国がどのように権利保障を実現したのか、法制化後も直面する課題とは何か、どのように解決しようとしているのか、などを明らかにした。また日本と比較し、4か国の事例から日本社会が考えるべき点についても考察した。以下、各報告と討論の要旨である。

## 畑報告

「ラテンアメリカにおけるLGBTの権利をめぐる動態と日本への示唆」

最初に、①ラテンアメリカはLGBTの権利保障において「先進的」であるが、国、地域や社会階層によって保障の進捗には大きな差があること、②対象4か国の保障実現の道のりは一律でなく、課題も多様であること、③権利実現の背景には1980年代後半から90年代の人権意識の高まりと、米州人権保護システムの存在があること、を指摘した。また日本の現状



に対して、司法・裁判の重要性、LGBTの権利を他のマイノリティを含めて「人権」という広い視点から捉える必要性などを論じた。

## 渡部報告

「アルゼンチン：同性婚合法化のその先に——トランスジェンダーの権利保障」

アルゼンチンのLGBT組織や当事者たちが政治的・社会的・経済的排除や抑圧を経験しながらも自らの権利を獲得してきた歴史を概観し、後半では、トランスジェンダーの人権をめぐる動きを取り上げ、民間・行政レベルでの支援と権利保障の現状（カトリック支援施設「カサ・アニミ」、モレノ市ダイバーシティ課、トランスジェンダー学校「モチャ・セリス」）を紹介した。今日アルゼンチンでは、人々は自らのジェンダー・アイデンティティに従って氏名・性別を変更する権利や性別適合手術を受ける権利をもっている。しかし、トランスジェンダーが自らのジェンダー・アイデンティティに従って「生きる」ことは決して容易ではない。アルゼンチンの事例は、同性婚等の法整備による権利保障が最終ゴールではなく、その先に取り組むべき課題があることを示しており、日本をはじめ、他の国々にとっても示唆に富むものであるといえる。

## 近田報告

「ブラジル：権利の保障と世界最大パレードによる主張」

ブラジルでは民主主義の定着とともに、社会的マイノリティを擁護する左派の政策や政治勢力が支持されたことで、多様性を尊重する方向で社会が変化し、性的マイノリティの権利保障が進んだ。左派労働者党政権期には司法により同性婚が認められ、性的マイノリティを対象とする施策が積極的に施行され、地方自治体でも制度整備が進んだ。また、世界最大規模のプライド・パレードも実施され、性的マイノリティの可視化や権利保障に進展が見られた。しかし、それらの反動として、性的マイノリティに対する暴力や差別の増加や、政治的な保守・右派の台頭などにより、多様性と排他性が混在・衝突するようになった点を、近年のブラジルの性的マイノリティをめぐる状況として指摘した。

## 上村報告

「メキシコ：国際的圧力の影響力と国内司法の違いから見たLGBTの権利保障プロセスの日墨比較」

本報告では、LGBTの権利保障の展開について日墨比較を行った。メキシコでは、1994年の北米自由貿易協定発効前に、米国の圧力で司法制度・人権制度の改革がなされた。その基盤の上に、欧州から性的指向を人権の保護対象とする発想が入り、一部州が同性カップルの権利保障を始め、次第に最高司法裁判所の裁定が入って、最終的に2022年11月に同裁判所の判決で同性婚が全州で認可された。日本では、2021年の東京五輪を一つの根拠に、住民請願によって2022年11月から東京都パートナーシップ宣誓制度が導入された。またG7における国際公約と圧力によって、2023年6月に国会でLGBT理解増進法が可決された。そして同法の施行以降から、最高裁はLGBTの権利保障に前向きな判決を相次いで出し始めた。日墨で影響した段階は異なるが、LGBTの権利保障に外圧と司法の果たしてきた役割が小さくないことを論じた。

## 尾尻報告

「コスタリカ：ナショナル・アイデンティティと反LGBT思想」

コスタリカにおけるLGBTの権利保障の歩みを振り返るとともに、その歩みがアルゼンチン、ブラジル、メキシコなどと比べてなぜ遅かったのかという分析を行った。まず、コスタリカでは2014年にLGBTの権利保障に熱心な政党PACが政権の座につき、LGBTの事実上の権利が整備されていった。しかし同性婚については立法措置で法制化できないために、米州人権裁判所という「外圧」を使って法制化を実現した。なぜ「外圧」を用いなければならないほどコスタリカは保守的なのか。それは、中央アメリカ連邦の一部として独立したコスタリカがナショナル・アイデンティティの確立に苦しみ、聖母ロス・アンヘレス信仰をナショナリズムと結びつける必要があったため、カトリックとナショナリズムが密接な関係となったから、ということが提起された。

以上の報告について、討論者からは、①地方政府にできることは何か、②フェミニズムとLGBT運動の関係、③最高裁の変化の要因、④党派性とLGBT政策など、多くの質問をいただいた。それに対して、①メキシコでは最高裁の圧力により最終的には地方政府が動かざるをえなかった。世田谷区については地方自治体ができることはやり終え、国の判断を待つのみという見方もある。②アルゼンチンでは二つの運動に協力関係と独自の権利要求がみられる。③ブラジルでは司法における「家族」の解釈の変化によるところが大きい。④コスタリカでは右派といっても宗教的右派と経済的リバータリアンに分かれ、メキシコでは選挙連合が多く、左右の単純な区分が難しくなっている、との応答があった。また会員からは、アルゼンチン現政権下での変化や、スペイン語教育における「性差のない表現」*lenguaje inclusivo*との向き合い方についての質疑があった。

## 〈パネルC〉

民族アイデンティティ形成の比較研究——少数言語教育と文化継承の視点から

[代表者] 生月亘（関西外国語大学）

[報告者] 敦賀公子（明治大学）

額田有美（南山大学）

生月亘（関西外国語大学）

牛田千鶴（南山大学）

[討論者] 江原裕美（帝京大学名誉教授）

本パネルは、ラテンアメリカ諸国の「民族アイデンティティ形成」の多様性と「少数言語教育」、「先住民教育」の関係性の考察をグアテマラ、コスタリカ、エクアドル、パラグアイの事例報告から行った。「教育学」、「社会言語学」、「文化人類学」という視点から、この問題に学際的な共有を試みた。「アイデンティティ」は重要な研究テーマであるが、各学界により定義や解釈に差異があり、国策や社会、文化的背景により「アイデンティティ」の表象の役割も異なる。それゆえに「民族アイデンティティ形成」研究の学際的共有を行った。

討論者や参加者から、「アイデンティティ研究」の重要性について貴重なコメントを頂いた。以下、各報告者の報告概要である。

## 敦賀報告

「グアテマラのシンカの人々の民族アイデンティティ再生への取り組み

——危機言語からの二言語複文化間教育プログラムの一考察」

軍事政権下（1935–45年）の弾圧により、文化表象を隠して生きてきた非マヤの少数民族シンカの人々は、言語は消滅の危機にありながらも、和平合意後の国勢調査で民族アイデンティティの拡大を示し、言語復興・継承という難題にも挑んでいる。本報告では、多民族・多言語・複文化国家をめざす同国の二言語複文化間教育（EBI）に基づき、2023年8–11月に実施された「シンカの言語・文化オンライン入門講座」の教材・資料に語られるアイデンティティ関連の言説を考察した。ラ米、中米および国家レベルの視点からシンカの歴史、居住地、言語の特異性が、さらに憲法や国連が保障する権利などが言及され、シンカとしてのみならずグアテマラ人としてのアイデンティティの重要性を謳った内容だと分析された。

討論者からは、シンカ語教育の政治的意図、同講座と学校教育との関係、EBI基準など、今後研究を進める上で大変有益なご意見を頂いた。

## 額田報告

「コスタリカにおけるモバイルテクノロジーを用いた先住民言語復興の試み

——現地およびオンライン調査からの報告」

本発表では、2023年3月までに行ったコスタリカでのフィールドワークとオンラインでの調査にもとづき、先住民居住区の出身者や住民が先住民諸言語の学習や文化的実践にスマートフォンやソーシャルメディアをどのように活用しているのかを主にプリプリの人びとの事例から報告した。具体的には、プリプリ語学習のためのデジタルコンテンツ作成（YouTube動画、携帯端末からの閲覧を想定したサイト作成など）や文化的実践（ハイブリッドで開催された居住区内の祭り、プリプリを含む複数の民族集団の女性たちから構成された先住民女性グループのミュージックビデオなど）の試みを示し、プリプリ語や先住民プリプリというアイデンティティを再／生産しようとする人びとの姿を指摘した。

討論者からは、考察を深めるためのヒントとして、「先住民居住区」と民族アイデンティティとの関係性や、個々の取り組みが将来的に公教育とどう節合しうるのかについて質問をいただいた。

## 生月報告

「エクアドル先住民教育の発展とアイデンティティ強化の可能性

——コロナ禍の経験を経て」

本報告では、文化人類学的視点からコロナ禍後によるアンデス高地における二言語・異文化間教育の役割や可能性の変化について報告を行った。コロナ禍後による急速な経済問題は海外移住の移民問題を加速させ、共同体の相互扶助を担う「共同体精神」の維持も困難とさせている。先住民教育だけで、先住民言語「キチュア語」や先住民文化の維持と、共同体の経済的発展を育成していくのは困難な状況だが、伝統文化と経済発展の融合を試みる、現場の取り組みの報告を行った。

討論者からは、公教育の現状について質問を受けた。また、先住民が「伝統文化」と「経済発展」のはざままで困難に直面しながらも、先住民教育の可能性を模索し続ける姿勢は、エク

アドルの先住民運動が成熟してきた成果なのではという貴重なコメントをいただいた。

## 牛田報告

「多民族社会パラグアイにおける複言語教育の実践と課題」

本報告では、19の先住民民族集団を対象とする複言語教育の理念と取組みについて確認し、異文化間教育の観点から今後に向けた課題を探ることを試みた。先住民教育法（2007年）や言語法（2010年）を経て策定された「先住民複言語教育計画2013-2018」では、先住民言語による教材作成や、異文化間複言語教育を重視した教員研修が展開された。また「先住民民族のための国家計画2020-2030」では、文化的多様性を認め、優劣のない関係性に基づき、異文化間で敬意をもって相互交流を行なうことが“interculturalidad”であるとされた。多民族社会パラグアイにおける、より平等で公正な共生の実現に向け、異文化間教育としての複言語教育の今後の進展が期待される。

討論者からは、先住民が国民アイデンティティを共有することの重要性や、言語の社会的プレステイジの問題等についての貴重なご指摘をいただいた。

## 〈パネルD〉

Nuevas perspectivas para un estudio comparativo de la diáspora y el transnacionalismo entre Perú y Japón

[代表者] Daniel Dante Saucedo Segami (立命館大学)

[報告者] Daniel Dante Saucedo Segami (立命館大学)

Isabel Cabaña Rojas (立命館大学)

Yuri Alithú Sakata González (立命館大学)

[討論者] Daniel Dante Saucedo Segami (立命館大学)

Este panel tuvo como objetivo discutir nuevas formas de entender la diáspora entre Perú y Japón. Dado que la inmigración de japoneses al Perú y de peruanos al Japón son procesos que tienen ya más de una generación adaptada al país objetivo, es posible realizar comparaciones para poder entender con más detalle los retos que cada grupo enfrentó, cómo superaron dichos obstáculos y cómo se da su gradual transformación para convertirse en ciudadanos de los países en los que residen. Comprender así ambos procesos no solo es un ejercicio académico que permite entender procesos históricos, sino que también nos da luces sobre cómo mejorar la situación de poblaciones migrantes en los países que los acogen, como es el caso de Japón.

En el marco del Proyecto Nikkei, una iniciativa del Centro de Investigación de las Civilizaciones de la Cuenca del Pacífico de la Universidad Ritsumeikan, los panelistas presentaron los resultados de sus investigaciones relacionándolos a temas de identidad étnica, nacional y social, así como el rol de los estudios sobre historia familiar para comprender los cambios identitarios (Daniel Saucedo Segami); la importancia de la organización de las poblaciones migrantes en los países objetivos, particularmente con el rol de la iglesia católica (Isabel Cabaña Rojas); y el rol del arte para identificar la diversidad de formas de identificarse como minoría migrante y ciudadano del país en el cual reside (Yuri Sakata González).

Durante la discusión, un elemento principal que fue posible identificar a partir de la comparación de los estudios es que luego de la tercera generación de migrantes empieza a observarse una mayor adaptación al país objetivo, donde el país de origen y su cultura se van convirtiendo desde elementos que evocan un posible regreso a la tierra natal en la primera generación, hacia elementos que se incorporan dentro de una identidad nacional en el país objetivo. Así, la idea de regresar al país de origen va perdiendo fuerza, mientras que la evocación al viaje (la diáspora en sí) se convierte en un elemento cohesionador de la comunidad migrante que les otorga a sus miembros una identidad grupal. En conclusión, una forma de aproximarse al estudio de estos grupos migrantes de un modo comparativo sería enfocarse no solo en los elementos que permanecen del país de origen en el país de destino, sino también en los elementos que estas poblaciones destacan del viaje y la adaptación a un nuevo medio.

### 〈パネルE〉

ポスト・サパティスタ期先住民研究の現在地：フロンティアからの報告

[代表者] 中沢知史（立命館大学）

[報告者] 神崎隼人（大阪大学附属図書館  
研究開発室）

福岡真央（関西外国語大学）

工藤由美（国立民族学博物館）

中沢知史（立命館大学）

[討論者] 宮地隆廣（東京大学）

本パネル「ポスト・サパティスタ期先住民研究の現在地：フロンティアからの報告」（代表者：中沢知史（立命館大学））は、メキシコチアパスにおけるEZLN蜂起から30年の節目に、ラテンアメリカ各地で先住民と関わるフィールド調査を実施している研究者が集い、フロンティアをキーワードとして研究の現場を紹介する趣旨で開催された。節目の年に何かを、という代表者の邪な意図でタイトルを付けてはみたものの、“postzapatismo”の語は2014年前後に現れたのち普及することなく廃れてしまったもので、パネルタイトルとして必ずしも適切ではなかったのではと多くの先達からご指摘を頂戴した。このように、パネル代表者には大いに反省させられる機会となったが、他方、会場における報告者と討論者との、またフロアとのやり取りは知的緊張に満ち、密度の濃い時間であったと感じた。この場をお借りして、報告者、討論者、パネルにご参加の皆様にご挨拶を申し上げます。

各報告の概要は以下のとおり。

### 神崎報告

「ウカヤリ河／ノン・パロ——水の多元世界をめぐる」

本報告はペルーでのインフラ開発構想「アマゾン運河プロジェクト」をめぐる論争を事例とした、〈水の多元世界〉の概念に関する民族誌的考察である。2012年にペルー政府が運河開発構想を公表すると、アマゾン先住民組織が抗議声明を発した。その争点のひとつは、開発の謳い文句「24時間365日の安全な航行条件の維持」であった。開発対象の河川は、雨

季に氾濫し、流路は蛇行を繰り返し変化し続ける。水の世界はこのように動的であるが、開発はそれを統治しようとする。先住民シビボの人々はさらに、水の世界にはその所有者アコロンがおり、アコロンが水の世界を支配し、大地を削り運んでいると語る。開発を契機にして、恒常的な統治からなる近代的世界と、アコロンに支配された動的な水の世界が衝突する。討論者からは、水の世界における時間性や、異なる世界同士の接合をめぐるコメントがあり、水の多元世界に関する理論的な議論が深まった。

## 福岡報告

「米墨国境先住民トオノ・オータムの苦境と抵抗——国境に生きるということ」

本発表では、米墨国境を跨いで居住する先住民トオノ・オータムに焦点を当て、1990年代から始まる米墨国境の軍事化がトオノ・オータムにどのような影響を与えているのかを考察した。特に大きな転換期となったのは、2001年の同時多発テロである。トオノ・オータムネーションで駐留する国境警備隊による監視体制の強化、国境における車両バリケードの設置、そしてメキシコにおける麻薬組織の暴力によって、トオノ・オータムの越境的移動が大きく妨げられているだけでなく、伝統的生活がもはや送れなくなっていると指摘した。討論者の宮地会員からは、先行研究との差はどこにあるのか、また、国境の軍事化は確かにトオノ・オータムに大きな影響を与えているが、トオノ・オータムは国境の壁に対する抵抗運動を繰り返しており、彼らの主体性にもっと着目するべきではないかという意見が出された。

## 工藤報告

「医療と社会的透過性：チリのマプーチェ/非マプーチェ間の交流に関する一考察」

チリでは1996年から開始された先住民保健特別プログラムの下、マプーチェの民族医療が公的医療に導入され、2006年以降首都でも公的資金を得た先住民マプーチェの組織が民族医療提供している。それはいわゆる国家に「許容された先住民」(Hale 2002)の活動といえるが、それを通じて、非マプーチェ(チリ人)とマプーチェの人びととの間に持続的な交流が生まれ始めている。それがいかに可能になったか、チリ人の語りを中心に分析した。民族医療は①両者の日常的接触を増加させたが、②チリ人患者にとってそれはマプーチェ文化との身体的接触に他ならず、マプーチェ文化への信頼に直結するもので、先住民/非先住民の壁の通過を容易にしたと考えられる。討論者と会場から、上記の先住民を見る枠組みと、チリ人の民族医療の理解について質問があり、前者には先住民の視点で見えてくる他の可能性を指摘し、後者には何より薬草の効果の体感が持つ重みを説明した。

## 中沢報告

「先住民族の遺骨返還をめぐる政治

——あるチャルーア民族の「祖国」ウルグアイへの帰還の場合」

博物館や大学など研究機関が所蔵している先住民族の遺骨が返還・再埋葬される事例が世界各地で増えている。本発表では、国際返還の事例であるチャルーア(charrúa)民族のウルグアイへの「祖国」帰還(repatriación)の場合を取り上げた。まず、ウルグアイがイベリア半島の両王権植民地のフロンティアに位置していたこと、建国期に組織的な先住民虐殺を経験したことを踏まえた。そして、民主化を経た前世紀末から今世紀初頭にかけてのチャルー

ア遺骨返還をめぐる政治過程を、主としてウルグアイ側の公文書や先住民運動が作成した資料をもとに辿った。返還をめぐる過程で問われ（なかっ）た遺骨の研究利用の是非や虐殺の歴史的記憶、人権について考察した。討論者・フロアから、研究の新規性や人権の意味内容、ウルグアイ先住民のアイデンティティ形成、返還されたチャルーア遺骨を「英雄」「文化財」視する政治への疑問等、有益な質問・コメントが寄せられた。

## 〈パネルF〉

アンデスにおける土地と人

[代表者] 佐藤正樹（慶應義塾大学）

[報告者] 佐藤正樹（慶應義塾大学）

大貫良史（法政大学）

鳥塚あゆち（青山学院大学）

[討論者] 藤田護（慶應義塾大学）

アンデスの先住民社会が持っていた思考の仕方や世界の捉え方は、スペインの植民地支配を経てどのように変化したのか。あるいはどのように変化を免れたのか。本パネルでは「土地と人の関わり」に焦点を当て、時代の異なる三つの研究報告を通じて、先住民社会について議論することを目指した。

### 佐藤報告（パネル申請時からタイトルを改めた）

「植民地期ティティカカ湖沿岸部における社会と土地の関係をめぐって」

ティティカカ湖南岸部の先住民村落ワキとラハの間で起きた土地訴訟の分析に基づき、係争地の所有権を確定させたのはスペインの植民地行政だが、その後も植民地行政を通じて所有権が推移していたことを明らかにし、先住民村落間の境界が可変であったことを論じた。一方、史料からは係争地域と地理的に接触しない湖東岸の村落ワリーナが「飛び地」をタラコ半島に持っていた様子が伺え、この「不連続な土地の支配」を今後解明すべき謎として提示した。

### 大貫報告

「農地改革期におけるアシエンダの脱一般化とアンデス農民の論理：

アプリマックの事例を中心に」、

ペルー山間部アプリマック県の事例分析を中心に、一般的に「悪」として描かれることの多いアシエンダのイメージの再考を試みた。現地での聞き取り調査に基づき、報告者はアセンダードとアシエンダ労働者が互恵的な関係を築いていたこと、その一方で農地改革後に成立した集約的な農業共同体組合の多くが失敗に終わった点を指摘し、必ずしも経済的動機に基づかないアンデス先住民の行動様式を強調した。

### 鳥塚報告

「アンデス牧民の放牧地との関わり方：経験と記憶からの土地認識」

クスコ県南部に位置する牧畜専門の共同体ワイリャワイリャでのフィールドワークに基づ

き、共同体の人々の土地・空間認識について考察した。報告者は、牧民たちが自らの生活空間を描いた地図とその作図過程の分析に加え、彼らと共に放牧をしながら共同体を巡る中で、人々が記憶と経験に結びつけて放牧地を認識していること、その放牧地は線的・面的に捉えられるものではないことを論じた。

以上の報告を受けて討論者は、ポリビア高地平原部を中心とする口承文芸を専門とする自身の研究に基づき三報告にコメントを行ったほか、土地に境界を導入することで生み出されるものや、そもそもアンデス高地という環境下における経済的動機とは何か、といった問いかけを通じて、時代も地域も異なる三報告をつなげて考えることを可能にした。

当日は企画者の予想を大きく超える30名近い来場者があり、短いながらも全体質疑においてはメソアメリカを専門とする研究者から様々な示唆を得ることができた。まず、井上幸孝会員からはパネル全体に対し、先スペイン期・植民地期・共和国期それぞれの時代が社会に課した特徴や制限を踏まえることでより考察が豊かになるのでは、とのコメントをいただいた。また大越翼会員からは、主に佐藤報告に対し、先住民社会が（土地ではなく）人とのつながりをベースに動いていたことを考慮するならば、謎として提示された「不連続な土地の支配」は理解不可能な現象ではないこと、また研究対象の地に足を運び、先住民言語を用いて調査を行うことの必要性についてご指摘いただいた。最後に、会場に複数の若いアンデス研究者（とその卵）の来場があったことも、嬉しい驚きであった。今後も、学術的な対話と出会いの場となるようなパネルを少しずつでも企画していきたいと思う。

## 〈パネルG〉

「現代」ラテンアメリカの民衆芸術とその諸相

[代表者] 本谷裕子（慶應義塾大学）

[報告者] 本谷裕子（慶應義塾大学）

細谷広美（成蹊大学）

小林貴徳（専修大学）

山越英嗣（都留文科大学）

[討論者] 鈴木紀（国立民族学博物館）

本パネルは、2023年春に国立民族学博物館で開催された特別展示「ラテンアメリカの民衆芸術」の企画者とともに、「現代」ラテンアメリカの民衆芸術を多角的な視座から論じた。当日はまず代表者が全体の主旨説明をおこない、代表者を含む四名の登壇者が報告を行った後、討論者より各報告へのコメントがなされた。会場からは文化の剽窃や知的財産権保護といったアートを取り巻く現代的な諸問題へのアーティスト側からの取り組みに関する質問や民衆芸術の知見をどのように防災へ活用するかといった質問などが寄せられるなど密度の高い議論が展開され、充実した研究交流の場となった。以下は、登壇者による報告概要である。

## 本谷報告

「展示される側」と「展示する側」による収蔵品の互酬的活用：

国立民族学博物館のグアテマラマヤ民族衣裳コレクションを視座に」



本谷は、国立民族学博物館で開催された二つの特別展において、報告者がグアテマラのマヤ女性と協同し、創造品（織物と衣裳）の知的財産権保護を推進する「織り手女性たちの全国運動（Movimiento Nacional de Tejedoras）」と織物学校の活動にフォーカスした展示とワークショップを企画・実施した知見をもとに、「展示される側」と「展示する側」から得られたフィードバックとそこから見えてきた相違点についての考察をおこなった。討論者のコメントならびに会場からの質問を通じて、創造品に対するマヤ女性たちの一連の取り組みを理解するには、知財保護に加え身体性が重要なキーワードになる点が今後の課題となった。

## 細谷報告

「レタプロ作家の軌跡：「アート」、クラフト、ツーリスト・アートの境界」

ジェームズ・クリフォードは、ルートとしての文化を論じているが、紛争により先住民村→都市→首都→マイアミという移動をした、国際的に活躍する2人のレタプロ作家を取り上げ、物理的移動と他者のまなごしのもと作品が変化していった軌跡を論じた。また、植民地時代に携帯用祭壇としてアンデス地域に導入されたレタプロが、1940年代に民衆芸術になった歴史を辿り、現在のレタプロ作家たちが、作品、クラフト、ツーリスト・アート分けて制作する一方、制作者間の分業も起こっていることを指摘した。巨大市場となっている現代美術の市場における先住民「芸術」の cultural appropriation を論じたことに会場から質問があり、意匠権の保護の難しさを回答した。

## 小林報告

「自然災害の記しかた

——革命前夜のメキシコと幕末の日本におけるポピュラーアートをつうじて」

本報告では、庶民を対象として刷られた読み物「かわら版」が災害をどのように記し伝えたのか、太平洋を挟んだふたつの世界、「革命前夜のメキシコ」と「幕末の日本」を事例に、両者の災害観を比較検討した。メキシコの版画家グアダルルーベ・ボサーダは災害を「世界の秩序が崩壊する前兆」として描いたが、その背景には、中世以来のキリスト教的な災害観（神は予兆や不思議をつうじて人間に悔い改めを求める）を読み解くことができた。他方、安政地震直後の江戸にあらわれた鯰絵からは、災害の両義性（災厄と世直し）が読み取れた。ユーモラスな「地震鯰」や擬人化された「なまず男」を主人公にした多様な鯰絵には、アニメズム的な災害観にあって、災害が善悪二元論における悪者としてだけでなく、「世直しの契機」として描かれた。災害観とは、人間が災害に与えてきた意味や解釈であり、自然と人間の関係性を探る糸口といえる。災害観の検討をつうじ、本報告では、現代における防災対策への活用という展望が示された。

## 山越報告

「メキシコのエクスポトと自然災害」

本報告はメキシコのエクスポトについての発表を行った。エクスポトは、病気、手術、交通事故、自然災害などに遭遇し、奇跡的に生還した際に感謝を込めてカトリック教会へ奉納されると理解されてきたが、実際にはコミュニティに広く生じた自然災害に関するエクスポトはきわめて少ない。近年、エクスポトは土産物として扱われたりアートとして新たに制作

されたりもするが、アートとしてのエクスポトには自然災害が描かれる。これは、自然災害を記録する意識が希薄ともいえるメキシコにおいて、新たなメディアとなる可能性がある。討論者からは、エクスポトがいかなる経緯で土産物となるのかといった質問がなされた。それに対して、近年、エクスポトは廃棄されてしまう場合があり、それが土産物店などに出回る事例が紹介された。

## 〈シンポジウム〉

プロレス／ルチャ・リブレが映し出すラテンアメリカと日本

[司会者] 浜田和範（慶應義塾大学）

[報告者] 受田宏之（東京大学）

Isami Romero（帯広畜産大学）

[ゲスト] ウルティモ・ドラゴン（プロレスラー）

[聞き手・文責] 川上英（慶應義塾大学）

本シンポジウムは、これまでのシンポジウムの形式を踏襲せず、プロレス／ルチャ・リブレを通してラテンアメリカと日本について考察すべく、日本とメキシコで活躍してきた現役のプロレスラーであるウルティモ・ドラゴン氏をゲストとして招聘し、ゲストと聞き手による約45分間の対話をメインとし、その前に研究者による20分間の報告を2つ置く構成とした。

プロレスの好きな聴衆にとっては世界的に有名なプロレスラーの話聞く貴重な機会となっただろうことは言を俟たないが、プロレスに関心のない聴衆にとっても、プロレスを通して見えるメキシコ像・ラテンアメリカ像と、そこから逆照射されて見えてくる日本像を捉えて、あわよくば自分の研究につなげる貴重な機会となったかもしれない。

フロアからの質問も、米国の研究者によるルチャ・リブレ論を引き合いに出した学術的な質問から体づくりについての質問まで多岐にわたり、30分という予定の時間もオーバーして大いに盛り上がった。

## 受田報告

「ラテンのカリスマを悼む：地域研究者によるアントニオ猪木論」

アントニオ猪木とは、ルールに縛られず、即興でルールを作り出すゆえにこそ多くの支持者を生むというラテン的なカリスマであった。こうした個性は、猪木とラテンアメリカの深い結びつきなしでは誕生しなかった。また、猪木の光と陰は、ルールを自己流に解釈することが規範となっており、支持するカリスマのルールからの逸脱には特に寛容であるラテンアメリカの魅力と課題とをみているようでもある。レスラーとしての成功と「闘魂外交」による日本外交への問題提起は、金銭スキャンダルや格闘技プロモーターとして引き起こした混乱を凌駕するものであり、その純真さと挑戦心は、保守化傾向を強める日本国内にとどまらず、国境を超えて人びとを勇気付けてくれた。猪木のように、異形で境界を易々と超える人間の生き様と社会での受容は、地域研究の興味深い研究対象となり得る。

## Romero 報告

「1990年代メキシコの社会変化とルチャ・リブレの復活」

今回のシンポジウムでは、プロレス／ルチャ・リブレが映し出すラテンアメリカと日本について議論した。そこで、特別ゲストとして、日本とメキシコで活躍してきたウルティモ・ドラゴン氏を招き、充実した議論ができた。筆者は、メキシコのルチャ・リブレの部分を担当した。具体的には、1980年代末から1990年代にかけて衰退していたルチャ・リブレがどのように復活したのかを論じ、その時期における筆者自身の体験についても述べた。この時期は、ウルティモ・ドラゴン氏がメキシコでデビューした時期と重なる。筆者自身はルチャ・リブレの専門家ではないが、今回はあくまでも1990年代を生きた1人のメキシコ人としての体験を紹介した。オーディエンスからも多くの質問があり、個人的な意見としては成功したシンポジウムであったと確信している。

## ウルティモ・ドラゴン

「日本人ルチャドールの見たメキシコと日本：1987-2024」

川上の質問に答える形で主に以下のような話がなされた。

1966年12月12日、「聖母グアダルーペの日」に名古屋で生まれた。小学生の頃にアントニオ猪木をテレビで見て衝撃を受け、プロレス・ファンになった。同じ頃にミル・マスカラスからも衝撃を受け、そこで初めてメキシコという国のことを知った。20歳の時に新日本プロレスの入門テストを受け、身長が足りなくて不合格になったが、いろいろとコネを使って頼み込み、特別に通いの練習生として受け入れられた。その後、日本に来ていたメキシコのプロモーターに直談判してメキシコ行きを認められ、1987年5月にメキシコに到着した。日本で一度も試合をしたことがなかったのに、メキシコに着いて2日後にメキシコでデビューした。メキシコは、プロレスラーになる入り口の狭い日本とは違い、とりあえず誰にでもやらせてみてその中から有能な人を選んでトップにするというやり方である。善玉と悪玉がはっきり分かれているところや、観客が素直に感情表現をしてプロレスを楽しむというところも、日本と違う。「ウルティモ・ドラゴン (Último Dragón)」=「最後の龍」=「ブルース・リーの最後の弟子」というキャラクターも、メキシコ人が日本人(アジア人)に対して持っていた単純なイメージから生まれた。ヨーロッパでもプロレスをしたが、同じラテン系と言われるイタリアはもとより、同じ言葉を話すスペインも、メキシコとは全然違う国なのだとわかった。それに対してラテンアメリカ諸国はだいたいみんな同じである。

## 〈ポスター発表〉

○コロンビアのエネルギーコミュニティの展望：先住民族ワユの事例から

松丸進（上智大学大学院博士後期課程）

2022年に発足したコロンビアのペトロ政権は、重要政策のひとつとして「公正なエネルギー移行」を掲げる。その中で、発電の民主化・脱中心化を目的とし、市民による協同組合的な電力生産を支援する「エネルギーコミュニティ」を打ち出した。先住民族ワユが多く暮らすラ・グアヒラ県は、貧困や電力インフラ不足が問題となっており、同県には多くのエネルギーコミュニティの設置申請がある。本発表では、エネルギーコミュニティとは何かを解説した上で、それが将来的にワユの人びとにいかに関与し得るのかを考察した。

質疑応答においては、コロンビアにおける地域コミュニティ主導による電力生産の実践の

研究が、日本における同様の実践にいかにかに寄与しうるのかという視点を持つことの重要性が指摘された。また、ラテンアメリカの他国における関連する事象について有益な示唆があった。これら有意義な意見や示唆を今後実施する現地調査に役立てたい。

なお、非会員4名からの以下の題目の発表がなされ、参加者と活発な意見交換が交わされた。

- ペルーにおける Fuerza Popular の組織化の検証
- ボルソナーロを支持する在日ブラジル人—宗教、メディア、トランスナショナル選挙運動—
- インドネシア首都移転から見る海洋アイデンティティの継承
- 2010年代以降に生じたラテンアメリカにおける地域統合の動向  
—市民社会型地域主義論による考察—

## 5. 早期キャリア研究者支援セミナー（地域合同研究会）報告

日 時：2024年4月13日(土) 10:00～16:00

場 所：オンライン（Zoom）と対面のハイブリッド会議

出席者（理事）：浅香、宇佐見、上、田村、北條、舩方、村上（理事長）、  
（運営委員）：安保、丹羽、長村

地域部会合同・ラテン・アメリカ政経学会後援の早期キャリア研究者支援セミナーは、2024年4月13日(土) 10:00から16:00まで、対面とオンライン（Zoom）で開催され、3件の研究発表があった。開催告知とリマインダーを学会メールで配信した結果、18名の申し込みがあり、当日は登壇者を含め全体で20名以上が参加した。討論者と参加者からは多様な視点からのコメントと質問が寄せられた。オンラインによる開催により、全国各地からの参加が可能となり、研究地域、研究分野を超える活発な議論が行われた。以下、第一部（個別報告会）と第二部（タウンミーティング）をそれぞれ紹介する。

担当理事：舩方周一郎

### 〈第1部〉個別報告会

#### 第一報告

周縁に生きる人々と食支援

——リマ首都圏チョリヨス区のコメドール・ポプラーとオジャ・コムを事例に

発表者：鋪田今日子（横浜国立大学大学院）

討論者：宇佐見耕一（同志社大学）

本報告では、ペルーが起源とされ1970年代にラテンアメリカ諸国で展開された食支援のコメドール・ポプラーと、コロナ禍で急増したオジャ・コムの研究動向を取り上げた。さらに、先行研究における主眼である食、ジェンダー、政治との関係の3つの側面とフィールドワークで得られたデータとの比較を踏まえ、今後の研究展望を提示した。

討論者からは、社会運動の展開やNGOによる支援の有無についての質問が上がった。また、食支援を行う組織が二分化されていることは検討の余地があろう、と今後の研究に有用な視点が示された。参加者からは、2つの組織の変容やカトリック系団体とのつながりについでに質問があった。加えて、政治的・歴史的な文脈を含めた分析の必要性が指摘された。

## 第二報告

ニカラグア革命政権の外交政策——ニカラグア研究の動向と広報外交

発表者：板倉渉（東京大学大学院）

討論者：イサミ・ロメロ（帯広畜産大学）

本報告では、ニカラグア外交史に関する研究動向を整理し、冷戦研究の手法が中南米諸国、ニカラグアといった第三世界への着目を促してきたことを主張した。また一方で、米・ニカラグア関係については後者の主体性がいまだに等閑視されている傾向にあることを指摘し、広報外交に着目した研究の方向性を提示した。特に、ニカラグア革命政権が冷戦の構造を利用することで米国世論に訴えかけ、米政府の介入政策を抑制させていたことを事例研究とともに紹介した。

討論者からは、ニカラグアや中南米の事例を「グローバル冷戦」の枠組みの中で解釈することの妥当性について指摘をいただいた。加えて、キューバやイラン等他の第三世界との比較の観点からニカラグアの特異性をどこまで説明できるかという問題についても議論が行われた。

## 第三報告

サンバの音楽はカーニバル法によってどう変わったのか

発表者：加藤勲（沖縄県立芸術大学）

討論者：マウロ・ネーヴェス（上智大学）

ブラジルのサンバ・カーニバルは市政府による援助を受けたコンテスト形式のパレードが開催され、その市の観光資源として重要な役目を担うイベントである。その時期に都市の路上空間で道のカーニバルも開催される。コンテストと路上のカーニバルで祭りをする団体は、それぞれ法律によって競争・階層性・非競争・非階層な構造と規定されている。近年では、集客数と予算規模でリオを上回るサンパウロを対象として、この政府が公布したカーニバル法によるサンバ音楽の影響を報告した。

討論者からは、20世紀前半のリオ連邦区内でバルガス政権時代のカーニバルに関する法律と、現在のカーニバルとの関係と歌詞分析について指摘をいただいた。また、州都以外のカーニバル、国政府の文化予算、カトリック主体であったキリスト教徒からプロテスタントが増えつつある宗教とカーニバルイベントへの影響の関連について議論も行われた。

## 〈第二部〉タウンミーティング

冒頭、村上理事長から、日本のラテンアメリカ学会がおかれた状況を説明するとともに、長期的な持続性を担保するために本会が早期キャリア研究者に以下の改革を行ったことを説明した。

1. 早期キャリア研究者の会費減額
2. 年報の電子化などの制度改革
3. 報告機会の拡充
4. 研究助成制度の拡充

これに対して参加者の間では以下のようなやり取りがあった。

(1) 早期キャリア支援セミナーでの報告

- ・研究の意義、研究の大枠を知り、自分の研究の意義を考える機会となった。
- ・年次大会ではなく、早期キャリア支援セミナーを通じて等身大の自分の研究計画を考える機会となった。
- ・学会敷居の高い場所というマイナスなイメージから参加しやすくなった。
- ・討論者を立てる方式は引き続き維持してほしい。
- ・4月の第二週というタイミングについて、修士論文の報告、博士後期課程の進学を考える学術振興会の特別研究員に申請する場合には、自分の研究を整理するちょうどよいタイミングである。
- ・他方で、セミナーの周知が十分に徹底されていない。ウェブや学会ニュースでセミナー情報を告知したとしても、対象となる早期キャリア研究者に十分に伝わっていないという印象がある。
- ・これまでのウェブと学会ニュース以外にも、SNS等を活用して外部向けの広報活動を活性化する必要があるのではないか。

(2) 早期キャリア研究者同士の横のつながりを広げる企画

- ・理事に早期キャリア研究者を入れるべきではないか。
- ・早期キャリア研究者同士の横のつながりを確保するためにメーリングリストを共有し、早期キャリア研究者自身で管理運営する組織の制度化をすすめるのがよいのではないか。
- ・ただしこれらの提案に対しては、個人情報会員に共有する場合に複数の問題があること、組織運営の業務が増えることで、本来行うべき研究活動がおろそかなること、参加者の熱量の違いでトラブルに陥る可能性もあること、活動を早期キャリア者に任せただけの場合、必然的に特定の大学関係者のみで固まり、別の大学出身者が参加しづらくなる可能性が考えられるため、理事会内で再検討するとした。

(3) 論文のインターネット公開、学会報告における剽窃の問題

- ・報告は長期的にはメリットがある一方で、特に発表時のアイデアを守るにはどうしたらよいかという提起が行われた。  
→剽窃の問題は倫理規定の問題ともかかわる。取り残されないように理事会で対応する。
- ・その他、紙媒体を残すことの意義についても提案があった。

(4) 学会の将来に関するコメント

- ・日本の地域研究に対して警鐘を鳴らす論調が多いが、ラテンアメリカ地域研究をする明るいシナリオを提示できるようにするにはどうしたらよいか。  
→人口減少が続く中で、ラテンアメリカ研究にも影響を与えている。しかし、社会に対して学会がどのような価値をつくっているかを示す必要がある。

- ・現実的な問題に学術的な立場から距離感をもちどのように貢献していくかは、社会が学術界をどう評価するかもかかわり、そのニーズを学会が理解しているかという反省とも関わっている。
- ・したがって様々な方法に適して地域研究を紹介していく。具体的には、他の地域学会との合同のイベントなどや、一般向け、学部生むけの講演会などによって、中間的な成果を社会にとどけるアイデアがある。

## 6. 第46回定期大会の開催案内

第46回定期大会は、2025年6月上半期に名古屋大学東山キャンパスで開催いたします。開催方式や日時、発表の申し込み等につきましては、HPやメーリングリストなどを通じて、会員の皆さまにお知らせいたします。

## 7. 第3回優秀論文賞受賞者のことば

日本ラテンアメリカ学会では、学会創立40周年を記念し、若手会員の研究活動を支援する目的で、学会誌の掲載論文を対象とする「日本ラテンアメリカ学会優秀論文賞」を制定しました。4名の選考委員の厳格な審査に基づき、第3回の受賞論文は安原瑛治会員（ケント大学博士後期課程）の“¿“Un pequeño dios” o “un maquinista atrasado”?: la trayectoria a Altazor de Vicente Huidobro”（『ラテンアメリカ研究年報』42（2022）：287-319）に決定しました。

担当理事：舩方周一郎

この度は重要な賞をいただくことになり、誠に光栄に思います。何よりもまず、論文執筆時の指導教官であった柳原孝敦先生にお礼申し上げたいと思います。

“¿“Un pequeño dios” o “un maquinista atrasado”?”と題されたこの論文には、二つの側面があります。一つ目は、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの創始者であるピセンテ・ウイドブロの詩学の内在的な変遷をたどったこと、そして二点目は、彼の詩を同時代のフランス・シュルレアリスムと比較したことです。4年前に論文を執筆したときの私は、この一点目のほうにむしろ関心がありました。詩人の強烈な個性がどこからきたのかを考察することで、自分なりにアヴァンギャルドという特異な時代を解釈したかったのです。そして、二点目のトランスナショナルな前衛詩学の広がりに関しては、一点目を補強するための傍証のようにとらえているところがありました。

これら二つのアプローチの力関係は、現在の私の研究では逆転しています。翻訳、文芸誌、書評等を通じたラテンアメリカと日本の文学的交流をテーマとする現在の研究では、もともと離れた両地域の作家たちが互いをいかに受容し自らの創作に活かしたのかを考察しています。受賞論文におけるウイドブロのアンドレ・ブレトンに対するライバル意識は、オクタビオ・パスの理想化された日本文学理解として変奏されている、ともいえるかもしれません。いつの時代も、文学者は互いに理解、誤解しながら、自身を世界の文学史のなかに位置付けているのです。

その意味で現在の私の「思いがけない出発点」となった本論文に賞が与えられることを、

たいへん嬉しく思います。

私はこの「ことば」を、イングランドはカンタベリーで書いています。英作文を書いている彫琢し、書いては彫琢し、それを繰り返しながら窓越しにのどかな平原と煉瓦造りの家並みを見ると、この地でラテンアメリカ文学を論じることの不思議にときおり胸を衝かれます。私にとってラテンアメリカとは何を意味するのか。



その意味で、ケント大学で指導いただいている Patricia Novillo-Corvalán の著作 *Modernism and Latin America* (Routledge, 2017) には蒙を啓かれる思いでした。彼女が指摘するように、カンタベリーにほど近い港町マーゲイト (T.S. エリオットが『荒地』の一部を書いた場所でもあります) にはその名も Buenos Ayres という通りがあり、それは、19世紀のイギリスとアルゼンチンの不均衡な交易関係を象徴しているのです (pp. 1-4、写真参照)。

ラテンアメリカとは私たちの知るあの広大な土地のみを指すわけではありません。それは、様々なかたちでこの世界に遍在しているのです。ラテンアメリカがどのように解釈、表現されてきたのか、それを考えていくことが、私が中南米研究に果たしうる貢献なのではないか、今はそう考えています。

(安原瑛治)

## 8. 『ラテンアメリカ研究年報』第45号の原稿募集について

『ラテンアメリカ研究年報』第45号の原稿を募集いたします。

### I. 募集対象

募集する原稿は、論文、研究ノートおよび書評(研究動向)論文です。

うち、「研究ノート」とは以下の目的で書かれた文章を意味します。

1. (他者の研究にも役立つような) 調査・分析の方法や技術に関する解説またはこの点に



特化した調査報告。

2. 新しいアーカイブや研究資料・データの紹介。
3. 他研究者の既発表研究の解釈・理解を助ける目的で書かれた（批判を目的としない）補足的考察。

また、「書評（研究動向）論文」とは、複数の文献、かつ／または、あるテーマの分野や研究を画するような文献を取り上げて、当該テーマ・分野についての、重要な研究動向を紹介し、検討するもので、独自のタイトルを持つ文章を意味します。

原稿は完全原稿で未発表のものに限ります。二重投稿をご遠慮ください。原稿と要約の双方について、必要に応じ、使用した言語の校閲を受けたものを提出してください。

## II. 投稿資格

投稿締切の時点で、本学会の会員であること、もしくは入会申請済みであること。共著原稿の場合は、筆頭著者がこの投稿資格を満たしていること。

## III. 日程

原稿提出締切日：6月末、9月末、12月末、翌年3月末

※3月末締切分は、編集作業の進捗によって、次号に掲載となる可能性があります。

## IV. 執筆要項

### 1) 作成方法

原則としてパソコンで作成してください。A4用紙横書きで、本文・注・参考文献ともに、1ページあたり、和文が32字×25行、欧文は60文字×25行を標準としてください。使用するワープロ・ソフトはMicrosoft Wordが望ましいですが、他のソフトでも受け付けます。手書きの場合は、A4版の400字詰め、もしくは200字詰め原稿用紙を横書きで使用してください。

### 2) 制限字（語）数

文字数は、標題・本文・注・参考文献・図表・謝辞などすべてを含み、以下のとおりとします。

和文論文：24,000字（400字詰め原稿用紙60枚相当）、和文研究ノート：16,000字（400字詰め原稿用紙40枚相当）、和文書評（研究動向）論文：12,000字（400字詰め原稿用紙30枚相当）。

欧文論文：10,000語、欧文研究ノート：8,000語、欧文書評（研究動向）論文：5,000語。図表は、1ページを占める場合は800字（和文）、もしくは370語（欧文）、1/2ページを占める場合は400字（和文）、もしくは185語（欧文）として換算します。提出時に制限字（語）数を大幅に超過している原稿は、審査の対象としませんのでご注意ください。

### 3) 要約

和文の論文、研究ノートについては、投稿時に、欧文要約（600語程度）を、欧文の論文、研究ノートについては、和文要約（1,200字程度）を提出してください。要約は、上記の制限字（語）数に含めません。書評（研究動向）論文については、要旨の提出の必要はありません。

#### 4) 執筆要項の詳細

節区分、引用、注の付け方など、詳細については、『ラテンアメリカ研究年報』執筆要項をご覧ください。全文をPDFファイルでダウンロードできます。原稿が執筆要項に従っているかどうか、原稿採否の基準の一つです。投稿にあたっては、執筆要項を守っているかどうかを、改めてご確認ください。

#### 5) 図版作成費用

図版のトレース、写真のスライド焼きなどに多額の費用がかかる場合、実費の負担を求められることがあります。

### V. 審査

審査は匿名審査制度によって行ないます。審査は、投稿者の氏名を伏せたうえで、原則2名の査読者によって行なわれます。査読者の氏名も公表しません。投稿にあたっては、執筆者が特定できるような記述は避けてください。これについても、執筆要項をご参照ください。

### VI. 原稿送付先

原稿は、投稿申し込み書とともに、編集担当者である奥田若菜宛に電子メールでお送りください。メールアドレスはokuda-w@kanda.kuis.ac.jpです。

### VII. 著作権など

- 1) 『ラテンアメリカ研究年報』（以下『年報』）が掲載する論文、研究ノートおよび書評（研究動向）論文（以下「論文等」）の著作権は日本ラテンアメリカ学会に帰属します。掲載論文等の執筆者が当該論文等の転載を行なう場合には、必ず事前に文書で本学会事務局にご連絡ください。また『年報』刊行後1年以内に刊行される出版物への転載はご遠慮ください。
- 2) 『年報』に掲載された執筆内容が他者の著作権を侵害したと認められる場合、執筆者がその一切の責任を負うものとします。

『ラテンアメリカ研究年報』第45号編集委員会  
編集責任者：奥田若菜、久野量一、菊池啓一

## 9. 新刊書紹介

長谷川ニナ（八木啓代 編訳）  
『ホセ・グアダルーペ・ポサダの時代、十九世紀メキシコ大衆印刷物と  
版元バネガス＝アロヨ工房』  
上智大学出版、2023年、326頁。（紹介者：渡辺裕木 慶應義塾大学）

本書は、著者の長谷川ニナ氏が十余年続けて来られたバネガス＝アロヨ工房および19世紀メキシコの印刷文化に関する研究の成果で、2012年から2021年の間に上智大学外国語学部の紀要にて、スペイン語で発表された論文をまとめたものである（301頁）。メキシコ国内の大学機関や名古屋市美術館が保管するホセ・グアダルーペ・ポサダ（1852-1913年）の作品を中心に、19世紀に出版された庶民向けの印刷物を、メキシコ近現代の大衆文化を紐解く一次資料として丹念に読み込み、執筆者、挿絵画家、出版者および出版当時の社会的背景と併せて考察し、名を残さずとも日常を力強く生きた人々の、具体的で迫力ある場面を描き出している。

第1章では、政治風刺漫画の作者であり、印刷所を営む実業家でもあったポサダの人生と彼の制作について、21世紀に入って発表されたポサダおよび19世紀の風刺画や大衆印刷に関する研究をもとにまとめている。第2、第3および第7章では、今日広く知られているポサダの作品を最も多く出版したバネガス＝アロヨ工房と、その創業者アントニオ・バネガス＝アロヨの人生や業績について論じている。その内容は、アントニオの没後約1世紀を経て、親族が保管してきた資料が精査、公開され出したためようやく明らかになりつつある知見で、当時のメキシコの出版事情を理解する上で、今後不可欠な資料になるだろう。第3章では、ポサダの代名詞「カラベラ（髑髏）」と、カラベラとアントニオの工房の関わりについても掘り下げられている。第4章から第6章、および第8章では、19世紀の大衆印刷物の内容を精査し、当時のメキシコ社会を読み取る試みが為されている。従来のポサダ研究の主流であった、挿絵の図像学的、美術史学的分析にとどまらず、テキストの表現や出版当時の世相の分析を通して、性別や職業、立場などの異なる庶民の日常、さらにはその心情に迫っている。

メキシコは1821年に独立したが、その後もアメリカやフランスに介入され、領土や、一時的には統治権も失うなど混乱が続いた。この激動の時期について、これまで様々な分野の研究者が成果を発表して来たが、時代に翻弄された庶民の生活や、庶民の視点から見た社会を伺い知ることは難しい。それはおそらく、市井の人々の生活や思想を知るための資料の多くが、体系的に収集、蓄積され辛いためである。また本書「はじめに」で指摘される通り、文学作品等で描かれる庶民の姿は、エリートの目に映る像であり、この時代の庶民の本来の姿とは言い難い。本書は今後、特にメキシコ近現代史を学ぶ学生や、特定のテーマに精通した研究者が、19世紀メキシコの庶民の生き生きとしたイメージを掴むための一助になり得ると期待できる。

本書の著者はメキシコ出身でありながら日本に精通され、編訳を担った八木啓代氏もメキシコ市に拠点を置く活動を続けておられるため、日本の読者には分かりづらい、メキシコ文化に関する要点をとらえた解説が為されていることも特筆すべきである。例えば一枚のオハに描かれた死後の世界が、メキシコ人の実際の死生観とは異なる点や（93頁）、別のオハに描かれる男性の姿から、「酔っ払いで無責任」といったステレオタイプとは異なるメキシコ人のひたむきさ、賢明さが垣間見られる点は（153-155頁）、指摘がなければ日本人読者には見過ごされてしまうのではないかと。また著者は、バネガス＝アロヨ工房の印刷物が、庶民向けの安価なものであるにも関わらず「けっして卑猥や低俗」な表現に流されていないことを繰り返し述べているが（まえがき）、一見破天荒に騒々しく動乱の世を生き抜いていたメキシコの庶民の、どこか達観した、現在のメキシコ市民にも通ずる一面を感じ取ることができる。

青山和夫編

『古代アメリカ文明——マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』  
講談社現代新書、2023年、317頁（紹介者：福原弘識 埼玉大学）

本書はメソアメリカ文明とアンデス文明の最新の研究成果や魅力を一般読者に向けて分かり易く伝える目的のもと、四人の専門家によって書かれた新書である。マヤを編者の青山和夫氏、アステカを井上幸孝氏、ナスカを坂井正人氏、インカを大平秀一氏が執筆を担当し、アメリカ大陸の多様な先スペイン期社会を網羅するのではなく、いくつかのサブテーマ（公共祭祀建築、公共広場、図像、文字）に沿いながら、各専門領域の最新トピックや関心が深掘りされている。

本書は序章と第1から4までの各章、そして終章から構成される。

序章では、「世界四大文明」史観、古代文明の謎と神秘、血生臭い「生贄」の虚像や、人類滅亡の予言といった歪められた文明観がなぜ捏造・再生産されてきたのかが整理され、中学高校歴史教科書における古代アメリカ文明の取り扱いの少なさや、商業主義的マスメディアの問題点が指摘される。

マヤ文明についての第1章では、マヤ神聖王は絶対的な権力者ではなく、公共祭祀建築や公共広場を舞台装置に、文字と神々や権力者の図像を使い「語り」を物質化し、それを民衆に向かって「見せる」、神々と人間をつなぐ仲介者としての王の姿が、考古学調査成果をもとに描かれる。

第2章ではアステカ王国の実像に、考古学と絵文書、歴史資料から迫る。従来のアステカ王国像は主に征服者であるスペイン人が残した資料に拠っており、西洋文化中心の価値観に基づく見方や解釈で描写されてきたことが批判される。近年はナワトル語文献の利用が広がり、それを批判的に検証することで、アステカ王国の宗教体系や世界観、政治的・経済的側面から従来のアステカ像が修正されつつあることが指摘される。

第3章ではナスカの実像に、地上絵の考古学調査から迫る。ナスカ早期には二つの居住地を結ぶルート上に野生動物、家畜、半獣半人の姿をした地上絵が丘の斜面に描かれ、神殿・居住地・地上絵の建築活動を通じ、あるいは居住地を歩き来する人々が地上絵を見ながら歩くという慣習的行為の反復を通じて、人間と動物の分類に関する情報、世界観や秩序、集団の連帯や維持のための社会的記憶を形成したと論じる。続くナスカ前期には、祭祀センターへの巡礼が地上絵とその中心点によって形成されるネットワークを通じて行われ、巡礼の途中で参拝者は豊穡をもたらす野生動物の形をした広場（地上絵）を訪れ、儀礼をおこなったとする。無文字社会であるナスカにおいて、地上絵は歩きながら眺めたり、巡礼の一環として儀礼を捧げたりする対象であり、そこで交わされる言葉や体験を通じて、社会的連帯や社会的記憶が形成される場であったことが描かれる。

第4章では征服されたインカの実像が、「勝者」であるスペイン人たちの「理解」に基づき歪められてきたことを、考古資料、スペイン人の歴史文書、16世紀先住民の語るケチュア語文書「ワロチリ文書」や民族誌から読み解いていく。インカ王は「帝国」の絶対的支配者ではなく、宇宙のゆるぎなき支配者・権力者である山の神々を恐れ敬い、その超大な力との関係を、公共広場でおこなわれる祭祀・儀礼等を通じて維持しながら統治した存在であったことが描き出される。

終章ではメソアメリカとアンデス両文明の特徴について概観し、よりバランスの取れた世界理解のために、西洋中心史観や旧大陸中心史観を相対化することができる古代アメリカの二大一次文明の正しい理解の重要性が述べられる。

本書は、平易に書かれた一般向けの新書とはいえ各章の内容はそれなりに専門的である。そのため専門家にとっても、新たな気づきやテーマを得る契機となる一冊と言えるだろう。喜ばしいことに、古代アメリカに関する書籍の出版が近年は豊富なため、初学者にはそれらの概説書と併せて読むことを勧めたい。読者にはきつと、本書が目的とする「人類史の常識に再考を迫る」体験があるはずだ。

田村梨花・三田千代子・拝野寿美子・渡会環共編  
『ブラジルの人と社会 [改訂版]』  
上智大学出版、2024年、276頁（紹介者：高橋亮太 聖心女子大学）

本書はブラジル社会研究の入門書として2017年に出版された『ブラジルの人と社会』の改訂版である。上智大学外国語学部ポルトガル語学科の講義「ブラジル社会論」の30余年の蓄積に基づき、田村（梨）会員や渡会会員といった同学科卒業生諸氏が各々の専門分野における論考をまとめたものである。

序章はブラジルの社会概観を示している。「大陸国家」ブラジルの地理的多様性を概説した上で、主にフランス人社会学者によって指摘された地域間格差などの社会格差を強調している。2000年代以降に実施された所得再分配政策を踏まえても、ブラジルのジニ係数が他国と比べて依然として高い問題が指摘されている。

第1章「ブラジル社会形成の歴史」の第1節は、15世紀末のブラジル発見に始まる先住民との植民者の関係、黒人奴隷制度や家父長支配といった社会構造を説明している。第2節では奴隷制終焉に伴うヨーロッパ移民の流入に触れ、第3節では国民統合の過程で必然とされた同化政策の展開や「人種民主主義」が台頭する経緯を描いている。第4節では、近代的階級社会が誕生した後であっても、ブラジルが人種と社会階級の相関性から完全には解放されない現実を指摘している。第5節では、人種的不平等の是正のために講じられたアフターマティブ・アクションが紹介されている。

第2章では、社会文化的に重要な役割を担ったカトリック教会と家族制度を概観し、その社会的役割を分析している。第1節では、ブラジルにおけるカトリック教会の歴史やその政治的圧力団体、民主化後の保守化に焦点が当てられている。家族制度については、植民地社会と家父長制家族の形成を中心とし、家父長的大家族パレンテラの機能を含め詳細な記述がある（第2節）。第3節では女性の解放や離婚法の成立と家族形態の多様化など今日の多様な家族形態について論じられている。

第3章「社会的公正への挑戦」の第1節は、都市化とそれに伴う地域間格差、農村から都市への人口移動、都市化とスラムの形成といった問題を扱っている。第2節では、1988年憲法下のブラジルで実施された条件付き現金給付（CCT）やその効果、教育の普遍化などについて多面的に論じている。第3節では民主化以降の市民権の浸透や市民組織の多様性や世界的連帯などについて言及されている。第4節は全面改訂され、女性の社会参加とフェミニシディオといった社会問題について、2023年のルーラ政権発足までの出来事をフォローしている。

第4章は世界各国でディアスポラ化したブラジル人のアイデンティティの行方や文化伝播を扱っている。ブラジルが1980年代に移民送出国となったことを契機とする在外ブラジル人に対する政府の対応の変化、主要な在外ブラジル人コミュニティの特徴などについて紹介している。第2節は在日ブラジル人に焦点を当て、彼らの来日経緯や滞日傾向やブラジル日系社会・日本社会への影響を分析している。

2000年代以降、日本語書籍におけるブラジル研究入門書の数が増えてきたが、その中でも本書は社会的見地から書かれたものとして比類のない良書である。評者は社会学の門外漢であるものの、それ故に大学の講義でブラジルの社会的側面を取り上げる際、本書は大変参考になるとの印象を抱いた。その一方で、評者のもう一つの関心は、上智大学の設立母体であるイエズス会やカトリック教会がブラジル社会の形成に果たした役割についてどのように記述しているかという点にあった。教会を中心とした宗教の役割についての記述が厚いことが本書の特色の一つであり、イエズス会士が先住民を保護・教育したなどの功績に紙面が割かれていながらも、教化の結果として先住民独自のアイデンティティや言語が喪失された事実には言及がない。したがって読者は、カトリック教会がブラジル社会に与えた負の影響を知るには他の書籍を併読して補完する必要があるだろう。

## 10. 事務局から

### 復会・入会・退会・資格変更・除籍（第178回・179回理事会承認）

〈復会〉1名

〈入会〉7名

〈退会〉6名

〈会員種別変更〉1名（一般→シニア会員）

〈除籍〉6名

### 編集後記

慣例により、理事会が交替する年度の7月号の会報は、旧理事会の会報担当理事が編集することになっております。

まずは会報の原稿を執筆して下さった会員の皆様に、心より感謝申し上げます。特に、大会直後にも関わらず、締切までに送って下さった大会実行委員長はじめ関係者の皆様には、厚く御礼申し上げます。

旧理事会では、会費のオンライン決済に向けた準備をはじめとする、様々な改革を重ねてまいりました。会報に関係するところでは、完全オンライン化や新刊書紹介でした。これまで新刊書紹介はその分野の専門家に依頼してまいりましたが、改革後は、テニユア・ポジションに就いている会員以外に優先的に依頼することになりました。これは「0.5ポイントでも業績評価に上乘せされるのであれば」という旧理事会の総意に基づくものでした。

幸運にも該当者からその分野の専門家が見つかることばかりだった、というわけでは決してなく、中には専門から少し遠い方にもお願いしたこともありました。そうした場合でも、学会からの依頼なのだからと引き受けて下さった皆様には、感謝の言葉が見つかりません。

これまで会報を支えて下さった皆様、誠にありがとうございました。これからは事務局として学会業務に関わっていくことになりましたので、引き続きよろしくお願いいたします。

（磯田沙織）

### 会費納入のお願い

2023年6月の総会において、これまで実施してきた会費振込用紙の発送をやめ、インターネットバンキングによる振込に移行する旨が承認されておりました。

しかしその後、国際文献社に確認したところ、この方式は運用するのが困難であることがわかったため、理事会で協議した結果、新たに会費のクレジットカード・コンビニ決済を導入することを提案し、2024年5月の総会において承認されました。クレジットカードでの支払いが困難な方は、最寄りのコンビニでお支払いいただけます。

現在新しい会費納入システムを構築しておりますので、例年5月頃をお願いしていた会費請求のお知らせは秋頃になる見込みです。会員の皆様におかれましては、本年度の会費請求のお知らせが届くまで支払いをお待ちいただけますようお願い申し上げます。

なお、クレジットカード・コンビニ決済の際には、学会HP内のマイページにログインする必要があります。パスワードがお手元がない場合「パスワードを忘れた方はこちら」というリンクをクリックし、会員番号および学会からのメールが届くアドレスをご記入ください。会員番号やメールアドレスも不明の場合は、国際文献社にお問合せください。

日本ラテンアメリカ学会 No.144

2024年7月31日発行

学会事務局

（会員情報の変更、入会・退会のご希望、学会HP内のマイページに関するお問い合わせ）

国際文献社

ajel-post@as.bunken.co.jp

（その他のお問合せ）

神田外語大学 磯田沙織研究室気付

ajel.jalas@gmail.com